女學雜誌

明治三十年十二月五日發刊

第四百四拾六號

東京 女學雜誌社

女鑑第百四拾六號

目錄

寺澤いそ女



我が儘をやめよ

我が儘といふことの惡ろきことなるは、誰も〳〵、常にいひもし、知りてもあることなれど、なか〳〵に、誠には、よく我が儘ならぬ人の少きころ、あさましけれ。

我が氣隨氣儘に振舞ふことは、志ばしは我が身の幸福のやうに思はるれど、つまりは、なか〳〵子たる身をあやまり、妻たる身をあやまり、母たる身をあやまり、友たる身をあやまり、國民たる身をあやまり、人たる身をあやまりて、我が身の不幸と成るものゝみ。

父母の膝下に在る時に、我が氣隨氣儘にのみ振舞ひたらむには、やさしき父母の心をいたましめ、父母が身を苦むるに至るべし。さらば、父母は、よしやわが子

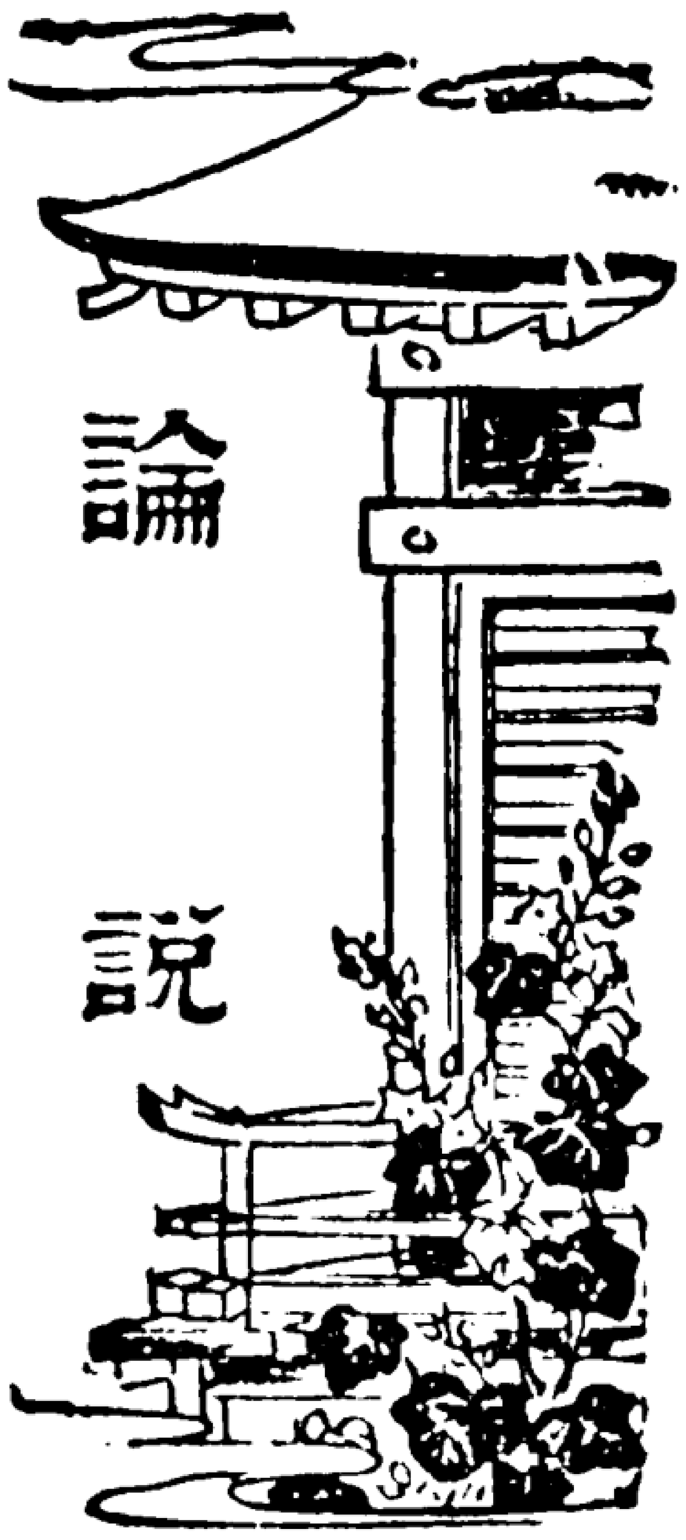
のかなしさに、これをなげきもうらみもせざらめど、されど、子たるの道をふみたがへたる罪は、我が身に去る能はざるべし。それのみならず、子を愛でかなしむ親心の闇にまかせて、我が氣隨氣儘の業に耽りたらむには、後に一家の妻女となりたらむ時に、常におとなしく良人に仕ふることを得ず、常にすなはに姑小姑の間に立つ能はず、常にやさしく家人に接する能はず、常に正しく一家を守る能はず、さては、家庭の母となりて、常にやさしく正しく、よく賢かるべき兒女の手本となるを得ざるべし。少時より心にしみこみたる氣隨氣儘は、容易に去ること能はざればなり。されば、少時の氣隨氣儘は、女子の一生をあやまらしむる本となるものにて、恐ろしとも恐ろし。

女子の一生にて、最大切なりといふべきは、初めて一家の妻女となる時なるべし。女子の重大なる責任は、これよりはじまればなり。さるに、此の大切なるきはを、まゝ、此の氣隨氣儘より、あられもなき横さまなる道にまよひ入りて、あさましき淵に沈みはつるものあり。なま學問せる女子にいと多し。或は、亡からむま

て必ず去るべからずと、父母も堅く敎へ、自らも深くちぎりて、嫁ぎたる家を、姑小姑に睦しきを得ざるより、かなしくも立ち出でゝ、父母が老後の心をいたましめ、自らが一生をあやまつ者あり。かゝるが中には、全く姑小姑の頑に片意地なる心より、わけもなく嫁をにくみ嫌ひて追ひ出すが如きもあり。これこそ誠に、千鬼にも萬鬼にもたとふべき姑小姑にて、さる姑小姑にあひたる妻女こそ、誠にいとほしくあはれなれ。かゝる姑小姑なる者は、やがて、我が氣隨氣儘の増長せるものにて、もとより容すべき者に非ず、にくみてもあまりある氣隨氣儘の女子のはてといふべし。さるたぐひにはあらで、自らの氣隨氣儘より、むづかしき姑小姑の間に、すなほに賢く立ちかぬる者あり。姑は、もとより我が生みの母の愛はあらず。小姑は、もとより我が誠の兄弟の愛はあらじ。さる間に、れだやかに身を置かむことは、もとより容易のことにあらざるを、露ばかりにても、氣隨氣儘ならむには、いかでおだやかなるを得べき。いかばかりむづかしき家なりとも、一重にやさしく正しく賢くのみうちむかひたらむには、彼の誠に鬼といふべき姑小

姑にあらざらんには、いかならんことありとも、妻女となりて、空しく破鏡のなげきにはあはざるべし。

斯の如く、子となりても、妻となりても、母となりても、やがて、女子となりて、氣隨氣儘といふ事は、女子の最も忌むべきことなり。謹まざるべけんや、戒めざるべけんや。



良家の女子には高等專門の學科を授くる必要なし

加茂之滿

世人往〻、世の漸く進むに從ひては、女子にも亦、愈〻高等專門の學科を學ばしめざる可からずと論ずるものあり。是、大なる謬見ならん。余は、今、玆に、一論を草し、此の僻

論を打破して、敢て其の迷を解かんと欲す。

内地雜居の期近く迫れり。女子の爲に憂ふるもの多くは、學術の高尙に、識見の高遠ならん事をのみ冀ひ、而して、其の他を思はず。然り。女子の學識高遠なる、以て、外人の侮蔑をふせぐに足るべしと雖、余はこゝに尙、一層、我が國女子の躰面を保ち、且外國人をして敬服せしむるに足るべき、最も重要なる特點ある事を信ず。凡そ、各國各其の風土を異にするに從ひて、國躰人情亦一様なる事能はず、彼の美なりと信ずるもの、我之を醜とし、我の善なりと賞するもの、彼亦反て之を顰する類多し。彼の美、必我か美に非ず。されども、天下の美事にして、吾能く得て之を爲し、彼及ぶ能はざるもの、はじめて其の特徴を誇るに足らん。況んや、我は東洋の君子國、道義徳行自ら備り、秀麗端正の女教遠く建國の始に基す。特り、我之を保持して四方に望むのみならず、世界萬邦をして、此の美風に同化せしめ、以て世界女德の根源を造るべきものは、即、我が國女子の貞操柔順、是なり。嗚呼、此の美をして益ゝ全からしめむ、以て宇内萬邦に教示し、彼をして敬服せしむるに足るべし。學の深き、識の博きは第二の業なり。此の美德全く能く備り、且日本臣民たる念を失はざらんには、内地雜居今日に在りと雖、亦何の狼狽することかあらん。特り學識の淺狹をのみ憂ふる

が如きは、抑枝葉なるのみ。

夫、斯の如し、何を苦で、雜居準備の爲に、みだりに女子に高等専門の教育を施し、學識を高遠にするの必要あらんや。否、雜居準備の爲に不必要なるのみならず、猶永久、女子に高等専門學科を課する必要なきを斷言す。斯く言ふ、女子をして、壓制的に、男子の下風に立たしめんとするものならんと誤解するものもあらん。されど、吾人は、強ひて斯の不合理の論をなすものに非ず、只、自ら備はれる天の性に隨ひて之を論ずるのみなり。我が國古來、男女の數は常に、殆ど相半ばせる此の天工、既に動かすべからざる男女職分の區別を示せるなり。たとへんに、國家を維持保安するに於て、内治と外交とは相半ばして、内治に沈重を要すると共に、外交に敏腕の必すべきが如く、一家の整理に於て達才明智以て外に當る主人を要すると同時に、賢良順和以て一家の内庭をとゝのへ子女に臨む夫人亦缺ぐべからざるなり。

されど、良家の女子たるもの、嫁ぎては一家の内事に當るべきものたること勿論なり。若此の務に當りて、何の餘暇ありてか、能く高等専門の學科を受くるを得んや。能く之を得たりとするも、其の學び得たる高等専門の學科、將何れの處にか之を用ひん、たゞに其の用にうときのみならず、其の女子をして、一方に偏したる家庭教育を

なすの虞なしとせず。此の故に、女子の教育は、專門にして高遠ならんよりは、寧ろ、低度にして博識ならんこと最も肝要なり。斯くいはゞ、或は、秀逸の才女、卓越の賢女の出づるを沮碍するものなりと非難するものもあらん。然れども、余は、順境に在る多くの女子に、非常の才女、女丈夫たらんことを望まず、たとひ之を望まんも、そは決して得べからざるなり。

然るに、世には、不幸にして良人を失ひ、或は疾病の爲に、人に嫁ぐ能はざるものなきにあらず。かゝる逆境に立つ女子は、自ら獨立の事業によりて、終生女德を全うすべき渡世の道を講ぜざるべからず。是等の女子は、元より、家政を治むるに、さまでの重任を負はざるものなれば、充分に專門の學術技藝を講究して、以て女教の主動者となり、才女ともなり賢女ともなり。又、女教師、女醫、看護婦、女流文學者等、唯、其の望む所にまかせて、各世を稗益する任務を果すべきなり。

斯の如くにして、世の順境に在る女子は、良婦となり賢母となりて、能く父母舅姑夫に仕へ、子女を薫陶鞠育し、弟妹を率ゐて以て一家を齊へ。翻つて世の逆境に陷りたる女子は、自ら孝子となり、貞婦となり、烈女となり、又名媛才姫となりて女風を師導せば、社會の秩序井然として備り、女德亦彌擧らん。夫れ然り、何を苦しんで、良家の

女子をして強て高等専門の學科を修めしめ、徒らに社會の秩序を亂す事をかせん。世の女子教育の任に在るもの、及び、その教育を受くる少女、宜しく猛省する所あれ。

寡婦論

三輪田眞佐子

讀者の過半は、清淨無垢の處女ならむに、今日、寡婦のことをものすることそあやしけれと疑ふものもあらんかなれど、をさ〳〵事の成るは、成るべき日に成るにあらず。その敗るゝも亦然り、福の起るは、起るべき日に起るにあらじ、禍も亦同じ。されど、天の未だ陰雨せざるに綢繆するごとく、處女のときより、既に寡婦の境涯を知りて、これに處する道を講せざれど、安心の域に達することを能はざるべし。

女子の幼きころは、旭にはにほふさゆり撫子、あるは露のこぼるゝ白菊に比べんばかり純潔なるのみかは、無我にして一點の邪念なく、胡蝶を追ひて野邊にあくがるゝ時もあらむ。妻琴の音に歩を止め、日の暮るゝを知らざる時もあらむなど、總て樂しき境涯に居れど、夢にだに、世路の難を知らざるもの多かるべし。

稍長すれど、種々の忘想起りて、かゝる良人に嫁ぎ、かゝる家庭を作り、その樂をし

て、正木の蔓末長からしめんと思はざるものはなし。旣に人の妻となりて、翠帳紅閨に坐して、子も榮ゑんには、人生の幸福こよなからん。況して、一門時めくにつけては、すきまの風も身にいとひ、世のうき人の情をぞ、露ばかりすら知らざるものも少からざるべし。

されど、飛鳥川淵瀨つねなきこそ世の姿なれど、幼時結びし榮華の夢は、一炊の間に覺めて、唯、月光のとこしへなるを羨む女子もあらん。將、つね〳〵山海の珍味にあきて、我はと思ひあがる婦人も、そが良人忽然と黃泉に去らむか、あはれ、門前艸深く、底上露しげりる悲境に陷いる例もあり。

蓋、年寒くして松栢の操をあらはす如く、女子は事變に逢ひてぞ、はじめてその品格を知るに足るべき。わきて、寡婦となりてこそ、人物の眞相を見るべけれ。そも〳〵、夫婦は、相互に、後れじ、亦先立たゝじと契るものなれど、良人死にしのちとて、猶生きし人に事ふる如く、貞操を守るは更なり、子孫を養育して、家名を落さゞるやうつとむるこそ、寡婦の道なれ。强て良人全盛のとき、これに事ふるのみが、妻の職分に限らざるべし。たとふに、一家朝夕のつとめは、婢妾だに辨ふを得ん。故に、妻たるものは、婢妾以上の理想を懷き、こを實踐すべき覺悟なかるべけんや。

むかし、阿佛尼が、寡婦となりけるや、いちはやくも、繼子爲氏は、亡父爲家の遺言にそむき、道ならぬ行をせんとなしけるより、いざよふ月にさそはれ、事の曲直を東の境にうつさんと、家を出でけるとき、閨のうちを見れば、なき良人の枕さへ、さながらかはらぬを見て(とゞめおくふるき枕のちりをだにわれたちさらば誰かはらはむ)とよみき。古は。良人の死后。その蓐などを保存するを以て。妻の道となしけむためならむ。すなはち、死していまだ墳墓の土乾かざるに、已に良人を忘れんか、その靈將に哭すらむ。實に良人を地下に冥目せしむるものは、獨り賢良なる妻ならんかし。



史談

寺澤いろ女

盬井福子

海山のもろ〳〵をこして名高く聞えし廿四孝の中にもかずまへまほしき孝女、その名を磯とて、阿波の國、德島、南大工町、寺澤善次右衛門の養女にて、その生みの親は、

何と呼びけん。幼きより此家にやしなひとられけり。磯女天性至孝にて、その東西を知らぬ頃より父母の意にかつてもどりし事なく、十歳ばかりの頃、玉ばこの學びの道に就かせられてよりは、いたくよろこびてつとめ學び、まだ十歳の童女ながら、學びのまどあかからぬ寅の時はかりより早く起き出で丶、女のとるべき業を何くれとまづつとめ、日出る頃より手習ふ師の方に行き、歸路もまた他の童女にまじりて、つどな、すみれの道草をつみなどせず、とく歸りて父母にかしづき。たちぬひより初め紡績のわざもまた怠らず、夜は子の刻頃まで、讀書手習くりかへしていねず、あだし心なくつとめけれど、其の道のすゝみも他にすぐれて、敎の師も感じけるとなり。

かくて、磯女、年やうやう長けてはや十八歳、今を一世の春時、世の少女ならんには、たい白妙の花の衣、みどりの髮、さばかり粧飾に心意をこらすべからんを、磯女はうるはしき衣を欲せず、刑釵だも請はず、髮をかいなづる手をあけて、まづ父母の腰をさすり、肩を撫で、巳がたちぬひのすきをあけては人の物をれりつむぎ、はては衣髮の事云ふべきひまをたちて、そのあたりの女の童子だちをつどへて、文の道をとき、手習ふ事を敎へ、寸時も怠らす、身もち正しく、行ひいさぎよく、よく父母を省て愛敬誠をつくしけれど、鄕里の子をもてる母姉たち、其の孝行、女儀を見習はせどやと思

ひ、よろこびて敎を請ふものの日に〳〵多くなり行きけるに、朝夕の烟も細からず上り行きけり。

磯女、廿あまり五つと云ふ年、その兩親、聟を迎へ、之にめあはせんとはかりしかど、磯女思ひけるは、なべて世の人の心は知り難きものなり。始めあれども終りあるは稀なり。もし、性質よからぬもの來りて、我を追ひ退くるやうの事あらんには、さらでも報い難き親の鴻恩を如何にせん、其の時くゆともせんなかるべし。妾、女なれども、兩親の世にあらせ給ふ限りは、如何にもして心安う世をすぐさせまゐらせんものをとて、よき程に聞ゑ辭し、ひとり精力をつくして、兩親には衣もわるからぬを撰びきせ、己は古きをそめかへして用ゐぬ。年四十路になるころ、母のすゝめによりて初めて新らしき衣を製へ、親の賜物とていたくよろこび着しぬ。食物も兩親には常に佳肴を設けて供すれど、己れは殘菜を食ひていとはず、孝養に年月をふるまゝに、父はいつしか老衰し、手足不隨になりけるに、磯女いたく憂ひ、人を雇ひて輿をかゝせ、山へゆきて樹木の色、鳥の聲に其の心を慰めける孝子が情こそあはれなりしか。さるに、枯木はいよ〳〵冬がれゆくを見て、孝女は昨日今日いや心細く、いやまし短くればゆる月日を恨めしく、淚にかきくらすほどに、父は遂に寛延の三年にみまかりけるに、磯女は

いたくなげき、物云はぬ墓に泣く事百箇日、哀悼に哀悼を重ぬるに、母もつゞきて中風にかゝり、いたく老耄して人にあへど、俄に泣き出しぬるを、見る孝女が心は如何に悲しかりけん。磯女はたゞそれよりは偏に母が心を慰めん事をのみつとめ、晝夜心をくだき、あるときは傍にありあふ前だれやうのものを髷にはり、寺子のもてる人形の水滴などをふりまはして弄び、みづから今様ぶしを謠ひて打ち笑ふ事もありしとは、彼の楚人老莱子が五彩の衣をつけ、親の傍に翫物を弄びしにもたぐへまほしき事にて、古今ありがたき孝子が心情なり。

心をくだきて慰むれど、母は、ともすれど己が心に任せず、磯をいたく揺罵などするに、孝女はすこしも顔色をかへず、已が一身のくるしみは知らず、たゞ母が手足の勞を思ひ煩ひて晝夜ねぶらず。母の病つかるゝまゝに、二便のもれたるも知らぬを、磯女、幾度となく溷穢をのぞき去り、しとゞ洗ひていさぎよくし、また秋の末よりばいつも母のために爐を開き、火を埋め、其の上に臥簟を設け、あたゝかにいねさせ、己れは其の傍去らず、衣帶をもとかず介抱する事十年ばかり、寶暦四年に、母もまたかへらぬ人となりはてしに、力も氣もとみに落ちはてゝ人心地もなく、訪ふ人々みなその涙にぬれまどひて、共にむせびけりとなり。事、時の市令に聞え、いたくその孝行

をめで、やがて本府に聞えて、磯女、身を終るまで町の課役をゆるしけるとなん。晩年に養女をもらひ、婿を入れしが、兩人とも皆よくいつきつかへしと云ふも、天、孝子に嗣をわたへしにや。壽七十三、天明二年寅五月五日、あやめふく日にかれけるも、天、孝女が行をね長く、軒の妻子につたへよとにや。

孝女しげ

藤塚熊太郎

今より六十年むかし以前に、羽後國、飽海郡、平田鄕、境村に、惣兵衛と云ひし人の妻に、しげと呼べるがありけり。良夫には早く別れて、一人の姑につかへけるが、是、又中風の病にかゝりて、足腰もたゝずなりぬ。さるを、しげは只管看護に心をつくし。晝はひねもす夜はよもすから、いさゝかもおこたらず。そのいとまの折には、かよわき女の手もて、耕やしのわざはさらなり、或は繩を綯ひ、或はむしろを織り、そをひさぎては、藥の代とし、またはほしき物など、いふがまに〳〵求めすゝめつゝ、あつき夏の日は涼しからしめ、寒き冬の日には、己れが肌をもてあたゝめ、いつも衣を清らもかにして着するなど、實に感すべきこと多かりきと、鄕人ども今に語り傳ふ。天保十四年正月八日といふに、家より火もゐ出でたりしに、折しも晝の事とて、村人どもみ

な野にいでゝありしが、その火炎のあがるを見て、驚きあわてゝ、はせ集るに、家忽にやけうせたり。やがて、この家の主の見ゑざるに心づきて、両三人、こゝかしこと探しもとむれども見ゑず、果は焼け跡をも尋ねしに、こはそもいかに、繁は姑の腰を抱きたるまゝ、諸共に焼け死にてぞありける。繁子おのが身一つならむ、などか免がるゝに難からん。さるを、姑を救はんとて、力足らずして、かくは焼け死にしなるべし。之を見し人、みな涙に咽びしとなん。藩主酒井侯これをきゝて、あはれなるものゝよとのたまひて、吊祭の料と建碑の料とを下し賜ひしかた、村人どもゝともにはかりて、石にほりつけて『孝子しげ之墓』と誌して碑をたてゝ跡をとふらへり。碑の端に歌あり、

千代までもしげる正木の玉かつらかくはしき名をあふがざらめや

今も、其の家あと、とみさかへてありといふ。この孝女しげ子のことよ。世とはくかつは天さかるひなにしあれど、埋れ木の、世に埋もれて、博くきこえぬが歎はしきに、つたなき筆をもかへりみず、かくはものしつるになん。



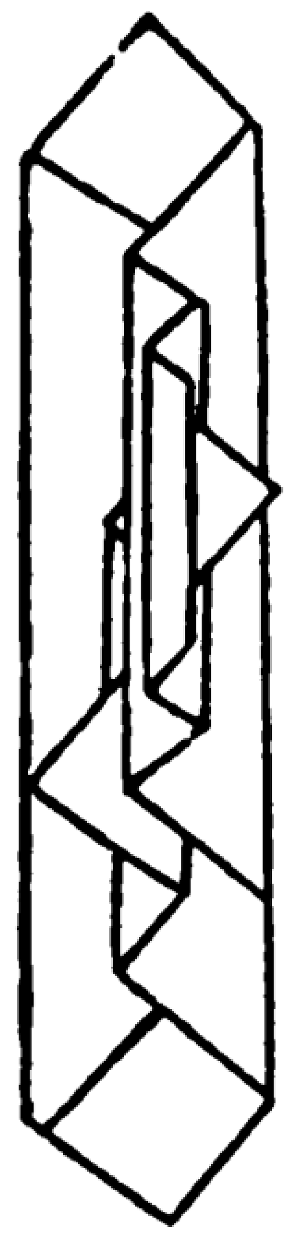
家政

折形

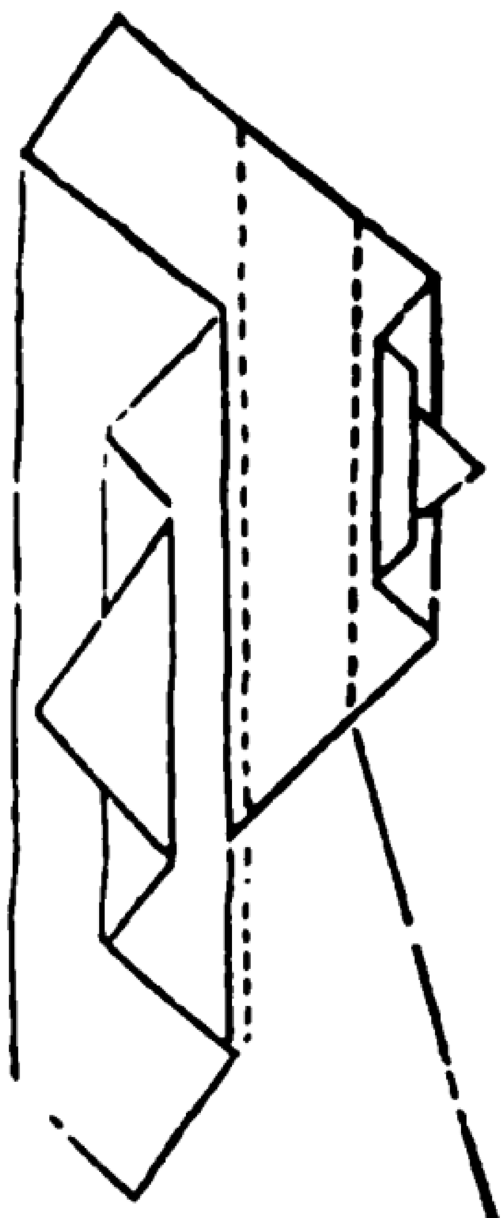
有住齋

弛弓握包

握革と書くべし



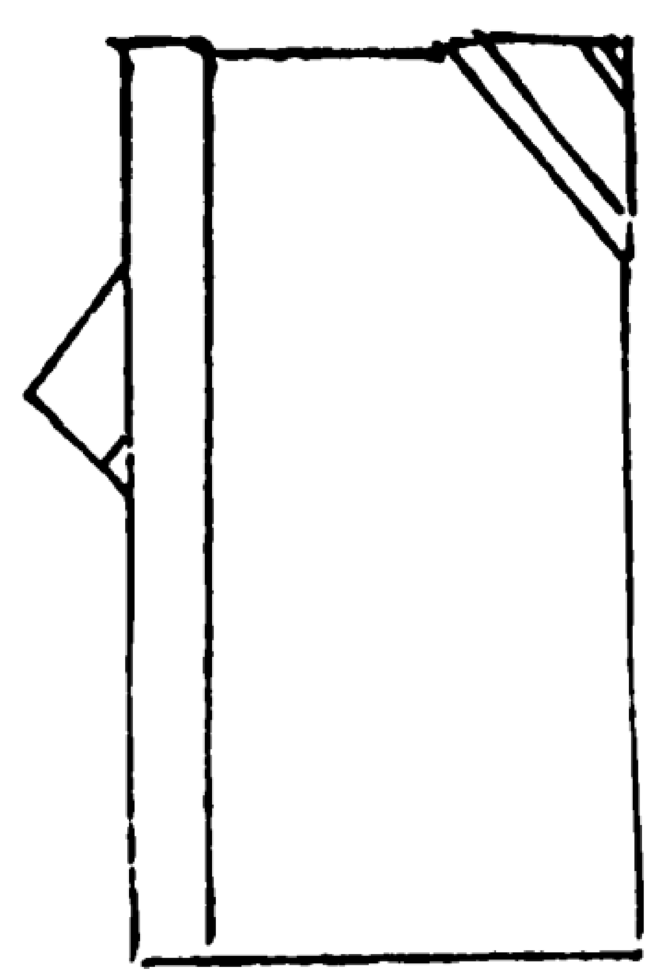
おなじく右を開きたる圖



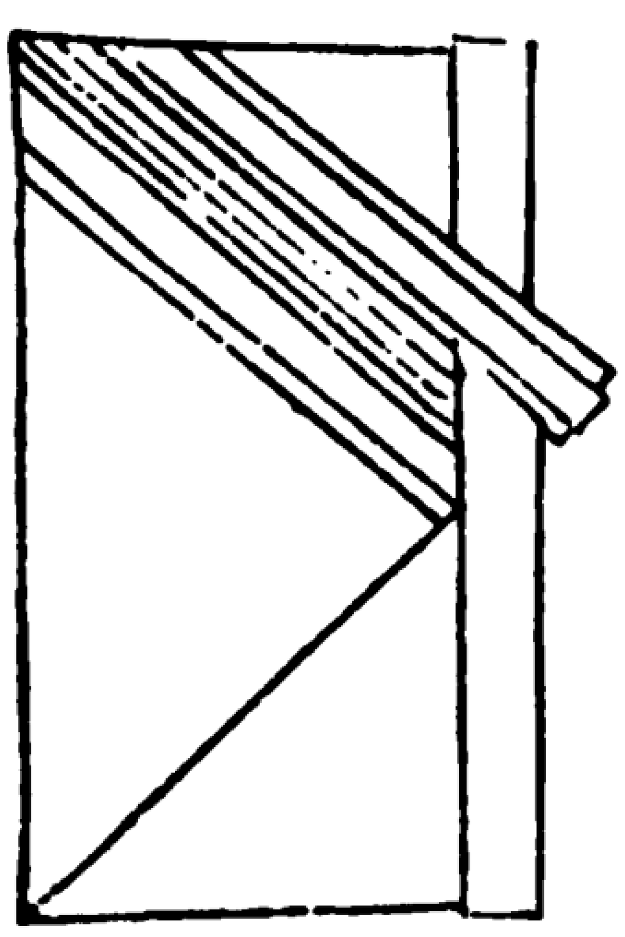
此の點線は右に折りたる跡なるり

弓絃包

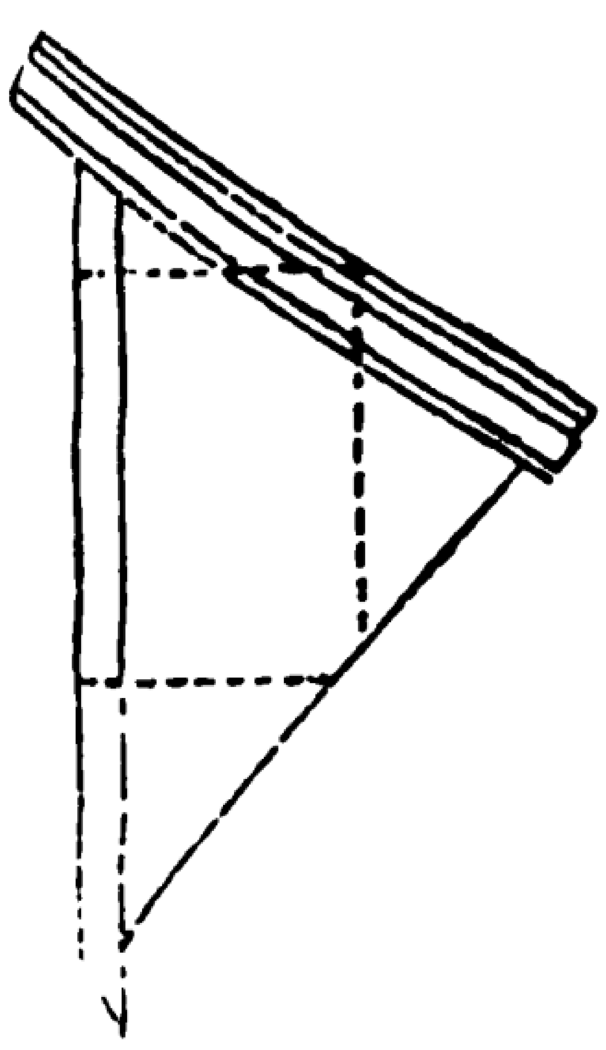
書付は、弓絃一筋、と書くべし。



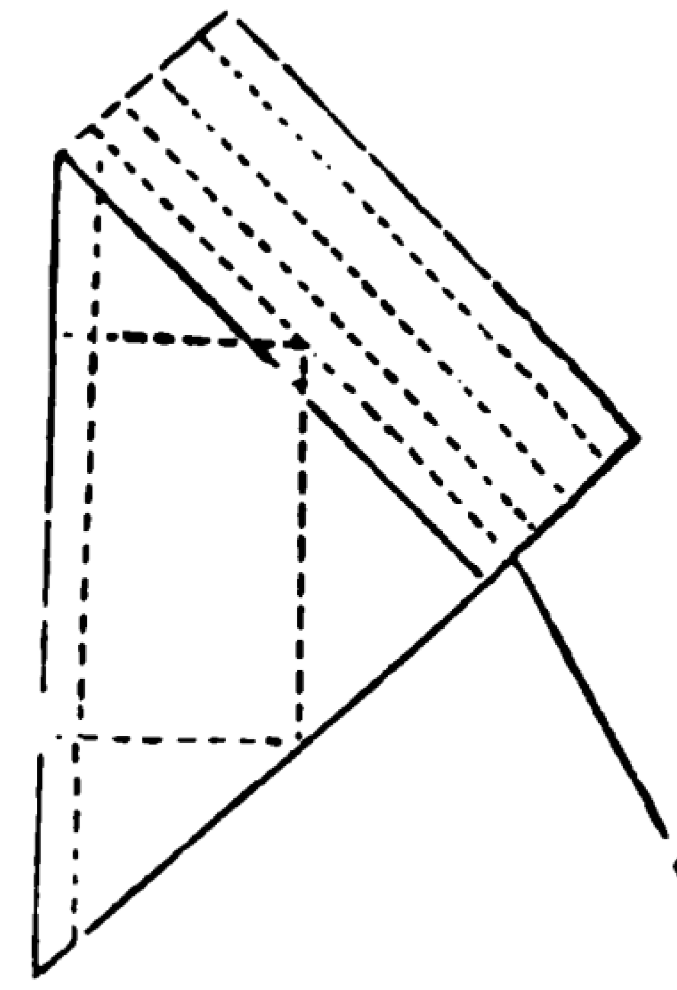
おなじく裏の方



おなじく解の一　上下と右とを開きたる處



れなし～解の二



此の點線は右より左に向けて折たる跡を示したるなり。其上は右に折りたる跡、又其の上は左にして最上なるは右なり。

茶の湯

孤峰庵不羨

關 葦雄

本誌第百三拾六號以降、續々茶道の教授法を筆記掲載して大方諸嬢の參考に供したり。然るに、本誌家政の欄内紙數限りありて、一手前を一時に登載する事能はず、從て風炉の季節に、風炉の薄茶、炭手前、濃茶の三箇を悉皆掲載するを得で、既に風炉の炭手前にて十一月も盡きたり。之れ編者の大に痛心する所なれども、今更詮なければ、此度よりは炉濃茶の手前を出すべし。諸嬢幸に此の旨を諒してよ。

爐濃茶手前水屋準備

先づ濃茶を點んと思ふには、第一に、薄茶の如く、帛紗を腰に挾み、扨濃茶入は、中裡を能く點撿し、清淨を要すべし。茶を掃くには、人數に合せ見計分量すべし。次に、茶入は、景或は沿形あらざ其の方を前にして後蓋の向を改め、象牙蓋洲あらざ、洲は炉にては左の方にしてきせ、扨袋を廣げ、茶入を納めすがりの緒を引締め、打留を向にして、前の輪にて一つ結び、左を高くし下の輪を折込、上の輪を折込、下の輪にかけて、左右へ引きて恰好を直すべし。（何

口傳）次に水指の水を九分に入れ蓋をすべし、次に茶碗を洗ひ拭ひて、茶巾茶筌茶杓を仕龍等、薄茶の時と同じ。法なれ共、一層念を入れ拵ゆべし、柄杓蓋置、翻の仕込も、薄茶の時に同じと心得べし。右相濟たらば、水指を持出道具疊の眞中を見積り、水指の外部向の方を四方の正中になる様に置付る、次に茶入を持出、水指の前に茶入丈明けて置合す、是にて實地なれど、客方へ案内いたし、又は稽古の上なれど、宗匠へ一禮をなすべし　（以下次號）

女禮

禮節教授　有住常子

行逢の禮　座禮

この禮は、座敷また廊下にても、ゆきあひたらん時の様なり。

稽古の様は、まづ兩方に居りて、正しく居り、双方とも左右の手を膝の上におきて、まへの方にかゝまぬやうに、踵を爪だてゝ、右の膝頭をすこしもたげて、左の膝を右へとずらして、右に腰をよろす様にして、さて眞直にたちあがりて、左足よりすゝみたまふべし。

同じほどの人との時の様は

三四尺ほどを隔てゝ立止り、右の方に、右足左足と斜になるやうによりて、

双方とも、同じやうに、左足を半足引て、左膝右膝と跪き。右膝頭に右の手をそへ、左膝頭に、左手をそへ、（そふる手は、甲の方へそりたるべし）まづ右膝を引て、きびすをおろし、次に左膝を引て、きびすをおろし、双手を、先に進めながら、頭をたら

して、一禮をするなり、左右の手は二三寸間をあけ、頭もれなじほど疊よりもたげて、一禮するなり、一禮をはらむ、頭をもたげながら、左右手を膝の前に引て、右膝頭に右手を、左膝頭は左手をそへて、まづ右を引きてつまだて、左をも引てつまだて、體を正しくして、右膝ゟすこしもたげて、右にひらきて、眞向になりて、立あがりて、行すぐるなり。

貴人との時の樣は

双方すゝみ來りて、貴人の方は其のまゝなるとき、下輩の者、まづ立止り、右の方へ右足左足とよりて、左半足引きて、左膝右膝と跪き、右膝頭は右手をそへて、左膝頭に左手をそへて、双手引合せて居り、双手を進めながら頭をたれて、つゝしみて御禮申上ぐべし。

此時、貴人の方は、眞向のまゝにて、左足を半足引て、左膝右膝と跪きて、居りて（此時引合をなさず）下輩の、御禮申す時、左の手を、そと膝脇につきてうけ、其儘立てすぐる。

さて下輩の者、双手を引ながら、膝頭につけて、右左と引て、つまだてゝ、右膝をもたげて、右にひらきて、眞むきに立て、貴人三尺ほど行すぎたまへる時、右の如くすゝみすぐべし。

同　立禮

双方すゝみ出で、三尺ほどへだゝる所にて、立止り、右の方へ、右足左足と二足、なゝめになるやうに引て、双方ともに、左右の手を、膝のあたりまで、おろして、一禮申すなり。さて向あひたる足の、左の足を、眞向になるやうになほして、双方ともに、行すぐるなり。右はれなじほどの人の禮の樣なり。

○貴人にむかひたらんときは、
貴人は、ますぐのまゝ、立止りて、下體は、右の樣になす折に、双手を膝より下部にさげて禮あるべし。此時、貴人は、膝の上部まで、双手をさげて、そと禮をなして、たゞちに、直にすゝみゆきたまふ。下體は、三尺ほどすぎたまへる時に、頭をもたげて、左足をなはし、ますぐに向きなほりて行すぐるなり、
この禮は、やさしげなれど、よくならはざれば、よろしき樣をなしがたきものなり。よく〳〵稽古あるべし。

たちぬひ

西山たい子

（八十二）股引の裁ち方

まづ左の圖の如くに、身の形、尻まはり、及び襠とその圖〳〵



も、形付け、表も裏も各二つづゝ、同じやうに裁つべし。寸尺等も圖を見るべし。
總計八尺四五寸ばかりなり。外に一寸巾にて五尺ばかり紐切を要す。

造花

共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

柚子

柚子は、柿の實と大同小異の造り方にして、形は赤ねむ土に川砂を加へ、又は桐の木にて、實物の通りの形を造り、之に紙を張ること亦柿と仝じくして、乾きたる后、形を縱に半ば切りて中の土形（又は木形）を取り出し、元の通りに合せて紙にて張り、さて、此の上に胡粉を塗り、生干の時に松葉を四五十本束ねて先を能く揃へ、此の實の上を突くべし、之を能く乾して后「オレンヂ」にて下染し、よく乾して后「レモンエルロー」にて其の上を染め、光澤を着くる事柿と仝じにすべし。

之に柄をつくるには、太き針金に青紙を卷きたるものを適宜に實物に參照して造るべし。

葉の造り方　葉は迦羅子を用ゐ、色染は、一切柿の葉と同樣にし、之を實物に合して形に斷ち、針金に青紙を卷きたるものを裏よりつけて柄となす。此の柚子の葉には、角たちたる筋なければ、葉の裏面より、鏝の小にて筋の通りをふくらますなり、極め紙は、紙を用ゐて、恰好よく造るべし。

密柑

密柑は總て柚子と仝じ樣なれば、煩をいとひて別に記さず、只其の異りたる處のみをいはんに、密柑は其の形、小く平たきを以て、形を紙にて張りし后、中の形の取り出し難きものなれば、先づ、紙を貼りつくる前に、形に油をひき置くべし。色染も、柚子と仝じ事なれども、猶青味を帶ばしむるには、「グリン」を澤山くはへて染むるなり。其の他柚子と異りたる處なし。小異の點は、實物を見て、自ら工合せんもおもしろかるべし。

だいどころ

焼残りの家鴨の調理

焼家鴨の冷えたるは、豆と調味するに限らず、其肉のみにて調理することを得べし。先づ骨に附たる上肉を切とり、残りの肉は骨附のまゝ、能程にきり、蒸鍋に投れ、同時に玉葱を細かに刻み「フライ」鍋に牛酪をとかして煎付け、其褐色になりたる時、葱を蒸鍋に移し、尚牛肉の汁、胡椒、食鹽、柚子の皮杯加へ、文火にて四五十分間煮たる頃、前の上肉を炙り、皿に盛り、此上に、蒸鍋の骨董煮を、粗き水嚢にて漉しながらかけ、冷えざる中に用ふべし。

煮残り鷄肉調理

煮残りの鷄の骨を去り、其肉を細かにきり、先其皮及びきりくづを鍋に入れ、之れに、胡椒、肉豆蔲を和し、又牛酪にて煎付たる玉葱を加へ、能程の湯を注ぎ、文火にて煮ること凡そ一時間の後、粗き水嚢にてこし、又鍋に戻し、此中に前の切肉を投じ、更に少量の米利堅粉、刻みたる柚子、能程の食鹽を加へて、能くかきませ、尚三四十分間煮て用ふべし。

煮残の犢の調理

煮残の犢の肉を細かに刻み置き、次に玉葱、洋芹、及び肉豆蔲等を細かに刻み、人參を二三分位に輪ぎりになし、之れを肉と共に蒸鍋に投れ、尚能程の米利堅粉、胡椒、食鹽を加へ、肉汁を注ぎ、文火にて二十分間程煮たる頃、汁の上に浮きたる雲母をすくひとり、一旦かきまはしたる後、尚五六分間煮て、レモンの搾り汁少量を和し、直に盛りて冷えざる中に用ふべし。

林檎蜜漬

林檎の瑕なきを撰み、皮を剝き、水中に浸し置き、菓中の甘酸を去りたる後、水よりあげて、水氣を乾かし、密中に浸し、一週間を經て、別に鑵中に精製の蜜を入れ、其中に投じ、蓋を蜜閉して暗き所に置き數月を經て食すれば其味ひ最も佳なり。

學園



秀歌集（十）

鹽井正男

○

紫の一本ゆゑに武藏野の
草はみながらあはれとぞ見る

○此の歌は、古今集の雜歌の部にありて、讀人は知れず。○紫、草の名なり。その莖はあかく、節は青く、その根は染物などにも用ひて、もと色ふかくゆかしき草にいひはやせり。○みながら。皆がらといふことにて、皆すべてといふ如き意なり。○あはれとぞ見る。身にしみてをかしく思ふよといふことなり。すべて、あはれといふ詞は、深く身にしみてればゆるをいふなり。

○一首の意は、紫の一本のゆかしさによりて、武藏の野の草は皆すべて、身にしみてゆかしく思ふよといふことなり。一本のゆかしき紫草ゆゑに、武藏野一面の草をゆかしく思ふとは、心情誠に面白しといふべし。

○

いざこゝにわが世はへなむ菅原や

伏見の里のあれまくもをし

○此の歌も、古今集の雜歌の部にありて、おなじく讀人は知れず。○わが世はへなむ。我が一生涯を此の伏見の里に暮らさむといふことなり。○菅原や伏見の里、菅原の伏見の里といふことにて、やは感動の意をこめたる詞づかひなり。菅原の伏見の里は、大和の添下郡にあり。○あれまくもをし。荒れはてむ事はマアー實にいとをしといふことなり。

○一首の意は、サアー我が一生は、もはや此の伏見の里にて暮らさむ。こゝを離れて他所へ行きなど、この久しく住みならひたる里のこの家も荒れはつるならむ、それは、マアー實にいとほしき事なれどといふことにて、此の歌は、桓武天皇の御遷都あらせられし時に、仕へをも辭して獨り大和の伏見の里に住み殘らむとて、よめるものならむ。情も詞も調も皆からあはれにやさしく風韻ある歌といふべし。

○

君が思ひ雪とつもらむ賴まれす
春より後はあらじと思へど

○此の歌も古今集の雜歌の部にありて、これは凡河内躬恒のよめるなり。宗岳大頼といふ人、越の國よりまうで來たりける時に、をりふし雪の降りけるを見て、おのが思ひは此の雪の如くなん積れると躬恒にいひければ、それをきゝて、躬恒のよめるなり。○君が思ひ。君とは大頼をさせるにて、躬恒を思ふ大頼のこゝろざしをいへるなり。

○一首の意は、貴方は私を思ふたこゝろざしが、雪のやうに深くつもりたりといはるゝが、貴方の

思ひが雪の如く積もりしてとならむには、それでは、貴方のおこゝろざしは賴むを得ず。如何となれば、雪は春になれば殘りなく消え去るものなれば、貴方のおこゝろざしも、また春より後には、今のやうにあるまいと思ふ故にといふことなり。面白くもよまれたり。

○

君をのみ思ひこしぢの白山は
　いつかは雪のきゆるときある

○これは、前の躬恒の歌をきゝて、宗丘の大賴が、いひかへしたる歌なり。○君をのみ。君をばかりといふことにて、君は躬恒をさせるなり。○思ひこしぢ。思ひ來しといふことに、越路をひきかけたり。○白山。前回にいへり。加賀の白山にて、北國へゆく路に當る。

○一首の意は、春より後はあらじと、貴方は私の思ひを疑ひたまへど、決して、さることはあらじ。貴方の事ばかりを思うて、はる〳〵と出で來れる彼の北國の白山といふ山は、何時とて雪の消ゆる時があるか、白山には何時とて更に雪の消ゆる時は無し。私の貴方を思ふこゝろざしは、その白山の雪の通りなり。春になりたりとて、消ゆることにては候はず、何時とて絶ゆることはあらじといへるにて、躬恒の歌に負けず、面白くもいひかへしたる手振、誠に妙なり。

○

我が庵は三輪の山もと戀ひしくば
　とふらひ來ませ杉立てるかど

○これも、古今の雜歌の部にありて、讀人は知れず。○三輪の山もと、三輪の山の麓なりといふこ

とにて、三輪の山は大和にあり。〇戀ひしくぞ。我れを戀ひしく思ふならむといふことなり。〇とふらひ來ませ。たづねて御出なされよと懇に示せるなり。〇杉立てる門。杉の立つてある門が我が宿なりといふ意なり。

〇一首の意は、私の住居は、三輪山の麓で御坐ります、戀ひしくおぼさむ、たづねて御出なされよ、杉の立つたる門が、私の家で御坐りますといふことにて、三輪山の麓に閑居したる人が、その親しき人などへいひやりしものならむ。何といふことはあらねど、調おもしろく、風韻ある歌なり。

ふゞくろ　第六稿

下田義天類評論

原文縣居翁作

第十

御歌筆くはへてまゐるなり。又かなたのもいそぎと聞ゑ賜へぞ、この眼を强ひて押開きて、やうやうと物も書き添へ侍り、たにさくの按は、ことにこの折、書きかね侍れど、聞ゑ賜ふ儘に、書きてまゐれり。其の歌の中に、かけたかき松を、冷泉家の事にたとへ給ふはいかゞ侍らむ。京家にて高き家と云ふは、攝家又は清花家などこそあれ。冷泉家などはひくき家なり。かゝる事も、其の人に向ひては如何にも云ふ事なれど、外よりはまかせては、心あるべき事なり、東にては、いとやむごとなき人すら、京家の人たちをぞ高き事とのみ思へれど、京にも、たかき賤き家のわかちの有るぞかし。

又、冷泉家などの弟子になる事はいと易き事なるを、かく題にて歌を集むるなどは、をかしき事ぞかし。

されど、人のせちに頼まむはよみもしつべし。よりて其の心して直しき、此の由御物がたり候へかし。京に久しく居りしからに、彼の人々の門弟に成りて、能くはわれらもなりぬべけれど、師となるべき人、すべて四五百年このかたにはなけれど、われらは弟子に成り侍らず。物くるひにて、ひとり云ふにも侍らざるなり。

(此の論は春満翁以來の議論なり。在満ぬしの國歌八論も、此の心より書けりと見ゑたり。冷泉家は爲相卿以來の家なれども、其の歌學の傳統は、二條家と同じく、京極黄門よりいでたる者なれど、こゝに五六百年このかた師とするほどの人なしといへるは、定家爲家の兩卿などより以來といへるなるべし。翁の眼力にては、實は爲家卿以上、定家卿俊成卿といふとも、師とすべき程のものとは見給はざりしなるべし。されど、俊成卿定家卿爲家卿などは、皆世にゆるされたる堪能の人々なるを、夫まで云ひれとさむは、餘り際限なきやうなれど、只漠然と、五六百年このかたと云はれたるなるべし。彼の流を汲めるものにてだに、稍歌の趣を知りたる人々には皆爲家卿以來は、その口つき無下にれとりざまになりたるよしに云ひ置けり。然はあれども、かの家世々に大歌所を預りたれど大方の人々は、皆その名に聞怖ぢして、いみじき歌詠とのみ思ひ僻めたるもの多かりき。されど、其の門に入らむ事をも、いみじき事とは思ひけむ。かれことさらに、この御をしへはありしなるべし。世人の歌道を知らざる事をいきどほられたる御心、末段の一句にあふれて聞ゑたり。堪能の人の、世人の眼識なきをいきどほる事は、古今

の常なるにや。曾て、定家卿も、左の言論を吐かれたる事あり。

凡歌を能く見分けて、善惡を定むる事が誠に大切の事にて候ふ。人の歌の善惡を見分くる眼識なくては、所詮みつかりの歌はいたつことにて候ふべし。只人毎に推量ばかりにぞ侍ると見え候ふ。其の故は、上手と世に云はるゝ人の歌をぞ、いとしもなけれど褒めあひ、いたく用ゐられぬ類の詠作をぞ、拔群の歌なれども、結句難をさへ取り付けて誹り侍るめり。只主によりて歌の善惡を別つ人のみぞ候ふめる。誠にあさましき事とぞ覺え給ふる。これはひとへに是非にまどへる故なるべし。恐らくは、寛平以往の先達の歌にも、善惡の思ひわかむ人ぞ歌の雌雄を存するにては侍るべきといへり。當時父の卿の光もありて、世に用ゐられたる

定家すら、猶この慨歎ありき。翁がこの言を發するはその懐抱察するに餘りありといふべし。余もまた、物くるひにてひとりこれを敷衍するにはあらざる也。

第拾壹

こゝの者への御傳忝かりゐやしぬ。事なく侍るなり。

年のくれいはひ給ひて、御文、はたこかねふた百ひらつゝ賜はれる、いと〳〵喜びいはひ侍り。此の冬は、殊に冴え侍りしを御方々平らかに仕うまつりたまひてうれしうなむ。おのれ事問ひ給へるぞ辱き。いといと煩ひつるを、漸々とさわやきつゝ、この近くは、いとよろしくなり行き侍り。未得立ちいて侍るばかりはあらねど、かくては新らしき年と共に立ちいでぬへうよろこびぬ。御心やすかり給へかし。

御歌墨引きてまゐる。御二方には、などてよみ給はぬにや。年の暮としの始などの事は、かならずよみたまふぞ手ならひに侍る。おそくとも見せ給へ。

（奬勵誘導、至れり盡せり。年の暮年の始めなどには、如何なる人の心も、一層ひきたつものなり。此の折には、萬の稽古事も、一段とひき立つ事、亦人情の常なり。不斷には不精勝のものも、此の折には何かと氣の向くものなれど、此の折を過さず出精せしむ。それつもり積りて、口のりも自由になり、興味も添ひ來らむ、平生もまたつとむる心いできぬべし。歌まなむと思ふほどの人は、能能くこの教を守るべし）

一正月は十八日に會しつべし。題は春のはじめの歌といふなり。是は古今集などにもある事なり。年立つ日春立つ日などの心にてはなく、春の來て十日廿日の間のさまなり。よし春は來ぬてふ事をいはても、春の初におらむけしき心にても言へはかなひ侍り。ことひろき題なり。春ははやう見せ給へ。よろづ年立て申いはひ侍らむ。

今日ことにいそがしくて、かくなめけなる紙などゆるし給はむかし。かしこ。



漫録

浮世いかだ舟（つゞき）

作者不詳

●茶の湯をいましめたる事

今はむかし、うき世房主君の御前にゑこうせしに、折ふしとりうりの男參りて、かうらい茶碗、せとの

かたつきなど、さまぐ〵ふるき數寄道具を持參して、しゆつとう人をもつて御めにかくる。主君すなはち、ねぢなほし、ひねりまはし、遠く見、近く見、下に置、手にとり御らんずる、さても見事なるものかなと、まはりからはほめそやす。そのねだんはといへば、ことの外に高直なり。それとても、かやうの物は、世にまれなれど買とるべしなど仰らるゝ。浮世坊申けるは、たよそちやのゆは、清潔にしてさわやか成を本とし、悟道發明のなりたちとす。もろこし趙州茶を喫し、わが朝の紹鷗道を得たり。しかるを、今の世の數寄といふは、ゐゐうを本としてたでりをきはめ、其のうつはものは、からの、日本の、古き物をそろへて重寶とし、ねだんたかき物を第一とす。禮儀まことにたゞしけれ共、用にもたゝぬつひゐれはし、すべて古き茶わんのそのかみは、定めていく千萬人か手にふれ、口によせてくらひけがし、其の、わひだに、白癩、黒癩、楊梅瘡かき、缺脣、喘息やみなども有べし。古き茶人のいにしへは、穢多、唱門師のいやしきやつむらが、手にもちとりあつかひぬらんと思ひやるもきたなし。只同じくは、よろづわたらしく、きれいなる物をもてあそび、思ふどちよりあひ、心をうちとけ、庭のたもて、さうじされいなるに、露をそゝぎ、めづらしからぬ花すこしうゑ、さわがしからぬ物がたりに心をたのしみて、茶をうちのみたらんは、道のたすけ成べし、用にも益にもならぬ物共、金銀たかく買もとめ、欲ふかくなるゆゑに、百姓町人に無理非法を以てくわやくをかけ、家中の者も、知行のへるはあれ共、加増恩賞のめぐみなく、かゝるたうよく不道の中より茶の湯をこのみ、道具をあつめ、せむきかこひすきやにね

り入、刀わきざしは手とほにをき、丸こしの有さまことに萬事をうちわすれ、れもしろかりうれしがるは、侍道のをこたり、是に過たる事有まし。すはや一大事といふ時に、さしも高直なる蘆屋のかまの、甲にもなるまじ、杓を、たて物にもせられまじ、墨跡をはたにもさゝれましけれど、思へどいらざるすり切のもとひ、ひつぱくのたね也。されど、すきやは、是貧乏神のやしろ、中路次は鳥井、かるたは午王、茶の湯はゆたて也と申つたへ侍る。此のちやわん茶いれひとつのわたひをもつては、よき侍五人は出たつべし。せんぢやうに五騎の兵心をわはせなど、五十騎百騎のかりむしやには、はるかにまされる重寶ならずやと申たりしに、出頭人も赤面し、主君も御無興にて、とりうりをかへされたり。浮世坊かくぞよみける。

貧乏の神のやしろはすきやにて
　茶の湯はやかてゆたてなりけり

かやうによみてけれど、大わらひになりてはてたり。

●くわんくわつもの、事

今はむかし、世にはやる快滑者といふは、さぶらひの中にも、町人の中にも、異風ものといはるゝやから也。かのくわんくわつものは、たとへど、なら刀のうはづらきらめきて、物のきるゝ事なく、たま〳〵きるれ共、名作の友劒には切をくれうちれくるゝ、そのごとく、かのくわんくわつ者は、れもてむき、つりひげ、うはひげくひちらし、物ごとじまんくさく、しさいらしく、まなこにかどたて、はりひぢにして、人をけなし、物いひこわだかは、わつかの事にもりくつをこね、こんじやうばねは道禮な

く、そこ意地きたなく、尻よわにれくびやう也。をのれが手にかなひたるものをなぶりて、喧嘩になし、れとしかけてりぶんにいたし、はないきつよくわれ共、きはめたるすね者、しふときともがらにあふては、こみつけられて、尾はねわからず、赤面してたたみのへりをむしり、人なかにわかはぢをかきてわらはるゝなり。まことに、ちどの大木、はす木刀とかや、そのなりは人かましく、心ねの益にもたゝぬともがら、諸家中にいつら共なく有さうなに、れ天道人をころさずといふがごとく、それ〴〵に知行きりまいをもらひて、身をすぐる者世に多し、是等の事思ひつゝけて、

世の中に能ある猫はつめかくす
くわんく、わつならむ臆病としれ

圓珠尼の史談を見て疑問

佐々豊水

熊本藩主細川侯爵家に仕へし沼田勘解由知行五千石が傳來の系圖を見るに、藤原姓沼田氏（初代）秀郷（二代）千常（三代）公光 從五位下相模守（四代）公俊 右馬允（五代）經秀 左衛門尉（六代）秀遠 從四位下刑部大輔（七代）遠義 筑後守（八代）家通 沼田七郎通上野國住沼田庄依改氏稱沼田（九代）家將 沼田太郎仕右大將頼朝公領上野國延久元年十一月御入洛同四年御得文治五年七月奥州征伐依嚴命給供（十代）家光 沼田七郎法名照心仕源頼家實朝兩主建保元年和田義盛叛逆之時於鎌倉若宮小路五月二日戰死（十一代）家村 沼田三郎（十二代）家政 沼田五郎法名妙瑞（十三代）經家 沼田五郎住河村 藤三郎秀基女

○妹圓珠姫

いとよわき梅の匂ひの花ごろも
春よりさきにほころびにけり

龍田山もみぢをわけている月は
にしきに包むかゞみなりけり

伏見院御製
上野や沼田のさとにまどかなる
　珠のありとはたれかしらまし

十四代 胤家 沼田太郎住沼田城延武二年十月足利尊氏征伐之頃與小山河村下山加加美等一族被宮方之不審被収上野國沼田庄
〔十五代 胤元 沼田藤七入道妙蓮仕尊持殿觀應二年正月廿日賜若狹國三方郡荻生庄〕

下　沼田藤七入道妙蓮
可令早領知若狹國荻生庄
　下司職事
右所宛行也早守先例可致沙汰之狀如件
　觀應二年正月廿日　　花押（足利尊氏）

十六代 胤光 沼田三郎左衛門尉上野介仕將軍家依軍功賜山城國西七條右京察津村彦五郎趾

　下　沼田三郎左衛門尉胤光
可令早領山城國西七條右京察津村彦五郎趾
　下司職在名田事
右爲勳功之賞所宛行也早守先例可致沙汰之狀如件
　文和三年九月十三日　　花押（足利尊氏）

十七代 光政 沼田上野介〔十八代 有光 沼田三郎左衛門尉上野介〔十九代 光建 沼田上野介〔二十代 光延 沼田三郎左衛門尉上野介〔二十一代 光兼 沼田新左衛門尉上野介仕將軍義晴居若狹國熊川城〔二十二代 淸延 沼田勘解由左衛門尉仕將軍義昭居熊川城〕妹麝香姫 細川兵部大輔源藤孝室細川越中守忠興母天文十三年出生元和四年七月廿六日卒〔二十三代 延元 沼田小兵衛尉改長岡勘解由左衛門尉文祿元年三月屬細川忠興賜長岡氏及知行五千石寛永元年八月十三日卒享年五十三歲

以後連續して熊本縣の士族たり。沼田系圖の圓珠姫は、九十代伏見天皇の正應元年より、永仁六年まで、十一年間にて、鎌倉將軍宮久明親王御在職の時の人なり。女鑑の圓珠尼は、百七代正親町天皇の永祿元年より、天正十四年まで、廿九年間にて、將軍足利義輝。義榮、義昭、內大臣織田信長、關白豐臣秀吉等在職の時の人とす。正應元年戊子より、永祿元年戊午は、二百七十年の後なり、いづれの御

代の圓珠を正すべきか。一の疑問なり。

明治卅年十一月三日天長節の佳辰にしるす

奇習　　西海坊

雨乞　その四

一滴の水も、溢れては、餘三年の苦となり、禹九年の績となり、涸れては湯桑林の祈となる。もとこれ、一滴の水のみ、日は日に革まりて一點の黒雲なく、金錢をとらかす時にわたりては、菜圃はかれ百姓飢渇にくるしむ。この時天油然として雲を起し、沛然として雨を降すときは、百姓蘇生し、稻粟その他百穀また蘇るに至る。人畜を死傷せしめ、田園を荒蕪せしめ、生民を糊口にせせならしむるも、これ一滴の水のみ、恐るべきは水、悲むべきは水害。されど、恐るべき、悲むべき飛報の來るときは、内務大臣の巡視となり、新聞記者の實地取調となり、賑救となり、義捐となりて、はては、畏くも、御手元金下賜に至る、悲き中にも、またありがたき涙のうたゝ雨の頬をぬらすめり。ひとり旱魃の殃に至りては、さまで顧みるもの少きは、如何なる故にや。

れのか里は、毎年霖雨の中頃をもて、稻秧の好時節とせり。されど、本年のごとき、旱魃に至りては、千有余町、いまだ一歩も稻秧することあたはず。昨年のごときも、肥後米の輸出夥かりしは、蓋これが爲なりしなり。

雨乞には、素より、神社々司至誠をもて祈りまつるなれど、また雨乞踊ともいふべき踊あり。いささかかきつらねむ。

雨乞踊は、何時頃より始まりたるものにや、故實家は、鈿女命のわざれきにちなみて、大神の御心を和こみまつるものなりといへり。果して然るか、この踊は、一町一村にあらずして、古へ幕府制の一郷一手永など、所謂聯合雨乞といふものなり。されど、自然に、各村の踊の競進會のごとき姿となり、樂器は、笛、太鼓、三味等なれど、踊以外に獨立したる一種の囃あり。この囃は、余程老練の人にあらざれど、出來ざるなり。この樂器は、鉦（雨乞鉦とて一種異りたる鉦なり）太鼓、太鼓に二種あり、〆太鼓、銅羅と稱するものにて、この三樂器を調子外さざるは、余程難しといへり。

日取も各村協議の上定まれど、各村その準備に、をさ〳〵怠らず、その日となれど、定めの場所に集まり、こゝにて總勢揃をなして、順次に練り行くなり。それより、漸次に踊るべき宮と定まりたる宮に至れど、鳥居の前より演して本殿を一巡するを常とす。この踊の種類は、種々ありて、枚擧に暇あらねど、諷刺的とも見ゆる可笑の踊あり、その踊は、シンキドノ（新奇殿）なり。この新規殿は、元百姓商人の有福なるが、幾何金を納めて、漸く士籍に編入せられたるものなり。されど、これを俗に金上（かねあげ）といふ。もとより、百姓商人なれど、たゞには死なし的の武士風に養成せられたるものにあらす。只、一と振りにても腰に横たへて士百姓に驕らんとの野心あるものになれるもの多し、故に、武者魂なきを罵りて作れるならん。扨その調子は、

新規殿の――刀のサシブリヤ――ヨケレドモ――
軍といふときやあ――、たーさ、ビックリシヤック
りと〳〵

れーさは相の手なり。その他龜衝、蝶々取瓢箪廻シ等多かれど略す。

かゝる雨乞踊して。果して雨の降るや否やは保しかたし。云かれども、もし雨ふらざれば、最後の手段として、清姫の姿を作り、陂に埋め、咽笛を止むるなり。しかし、これは非常手段にて容易に行はず、行ふときは、大概一週間を待たずして、膏雨沛を徴へすがごとしといへり。

この雨乞は、大澤名山のある所によりて異なれど、今は只一般を記すのみ。

上げ箸と下し箸　その五

こは、所によりては反對なることあり。わが里にては、縣内一般に、膳の縁に箸を置きかけずして、膳内に下ろし置くときは、凶事のあるを知らしむるものなりとて非常に忌む、これを下ろし箸、又は落箸といふ。これは葬式、及法會などに用う、その他は、總て膳の縁に箸の上部五分斗りの處をかけて置くを常とす。古へ武士の吉相を祝ふ頃には、これらによりて下男下女の手討等まゝ聞かれあたれど、今はさる事もなし、されど、不意の執拗をかもすことなきにしもあらず。注意すべきこと共なり。

飛白とくづし織　その六

舊幕時代にて、細川藩にては、士族の飛白、及ぐづし織といふもの一切着ずして、これらは、大体百姓町人の着る服なりき。今も尚、用ゐざる處、處々に見受けらる。

養痾漫筆の一

親々書屋主人

余は、久しく、陸奥なる、岩手の里に遊び、夏は北

上川に掉さし、秋はもみぢを、岩手山のふもとに愛で、、一とせあまりを過せしが、今年夏のころより、病にかゝり、二三月を經れども病いえず、鬱々として日を送りけるうちに、はや神無月、橋姫の紅葉織なす頃とはなりぬ。北國のことゝて、岩手の山には此月の初つかたより白雪を戴き、朝霜たきわたして、寒さ身にしみ、夕月夜かゞやきて心に物淋しく、片しく袖の薄きを覺ゆるものから、いよ〳〵病をますのみなれど、くす師のすゝむるまゝに、暖き地方に遊びて、みを養はんと思ひたち、行李とゝのへ、廿日ばかりに盛岡なる假住をいでたつ。朝とく起れは、霜白く庭にみち、北風日頃にまして、寒さ殊の外なり。車をよびて、停車場に向ふ、岩手山をかへり見れど、半過ぎ雪もて覆へり。今朝の寒さ増りしも之かためならん。車いそがせて、停車場にいたり、七時半の汽車に打のる、車中のことゝて、心をなぐさむへきものもなく、しるべなければ、話すこともなし。途中、一ノ關に停車す、一ノ關は、平泉中尊寺を去ること二里餘り、中尊寺は、陸奥の藤原氏盛なりし時、建立せし寺院にて、彼の黄金をもて、かざれる金色堂も、此地にありと聞つれは、往きて跡をとぶらはばやと思へど、病の身なれど、空しく止みぬ。此邊は衣川などの古跡多しと聞きぬ。孃たち、東北にいかるゝ事もあらばよりて訪ひ給へ學ひのたすけとなることも多からんかし。

午後二時といふに、松島の停車場につきぬ。松島は、盛岡を去ること五六十里、病の身は、猶此の先き百里餘の遠路を、乘りつゞくるにたへず。せめて松島の景色を見て、旅路のつかれをやすめんと、車を降りて、山月亭といふに憩ふ。松島は、これより一里

といふ、車をやといていでたつ。けふは、午後より雨ふりそぼちて、車に母衣かけて走る、いといふせし、稲田の細路林の中など過ぎて、やう／＼松島に着し、旅店鈴木屋といふに宿る。樓は三階にて、遠く灣内を見渡し、こゝちいとすがすがし、時なほ早く、雨もやみたれど、家のわらべを案内として、先づ瑞巌寺に詣づ、門ふるびて、老たる松、寺をかこみたり。

門に入て左の山に、古へ東夷のすみし穴居のあとといふあり。田村將軍東征の時、夷どもを追はらひし跡にて、後某僧が、供養の爲に、穴居の内外に、佛像をきざめりとぞ。瑞岩寺は、彼、雲居和尚をもて名だかし。寺のつくりいと廣やかにして、堂内に、彫たる畫きたる佛像あまた、たくみをつくして、たてならべたり。

寺中に種々なる珍品を蔵むときけども、日暮れけれど、童をともなひて宿にかへれり。寺門の外に松島の産物をひさぐ、家づとにせんとて、貝細工、穴なし竹、うもれぎの器などもとむ。夕かたより雨また降りいづ、ゆあみして、ゆふげとゝのへ、臥戸にいる、松風のおとと、岸うつなみに和して、枕邊にひゞき、病も愈えなん心地ぞする。

常は朝いがちなる余も、松島のあけぼのゝ景色みんとて、とく起きいづ。樓を下り渚にたちて望めど、御島の霞たなびきて、波靜かに、あまの小舟こぐれと遙にきこゆ。幾百の大島小島縹渺として水雲遠く浮ぶありさま、まことに、日本三景の一なる名にそむかじ。五大堂は、陸にちかき小島にて、松かげ深き中に古き御堂あり、五大明王を安置し、政宗卿の尊信せられしものといふ。此の處いと眺よし、また家

のわらべを伴ひて出で、觀瀾亭を見て御島へ行く、道に三光の松とて、大なる岩に松のれひまつはれるあり。

先年　かしこくも　陛下東北へ御巡幸のれり、叡覽まし〻松なりとぞ。谷の間をたどり行く、欄檻なき橋あり、これを渡れば御島なり。橋のこなたより望めば、島の岸邊は、すべて、崖をきざみて佛像の形を造れり。島の左手に一亭あり、其傍に醫國堂あり、壁落て、屋根くち、見るかげもなし。されども、古は、國を醫療せし大德禪僧修法の道場ならん。小松小笹の細道を右に取て行く、また一堂あり、國師座禪堂といふ額あり、雲居和尚が座禪して大悟徹底の三昧に入しは此處なりき。見をはりて、此處より宿にかへる。童子いふ、松島のけしきは富山にあり、徃て見給へとす〻むれど、病て足よわければ行かず。松島の全景を見んとならば、高きに登りて眺むるか、あるは舟にて廻り遊ぶべしといふ。

けふは、鹽釜に遊びて、仙臺へ行かんと思立ち、午前十時頃松島を舟出す、波靜にして風順なりければ、帆あげて走る。島々の間を廻り行くま〻に、舟子彼處此處の島々を指して、一々名を敎へしかど、數多ければ記臆せず。

かくて一時間ばかりにして、舟は鹽釜につきぬ。汽車に乘るに、尙、早ければ、鹽釜神社に詣んと、宿を出で、市中を過て神社の男坂の下に行き、仰ぎて見れば、石段の高くして急なること數百級、あへぎあへぎ昇るに、殿堂などの壯麗にしてかう〴〵しき、社内の神さびたる、古木立の苔むして神靈のいやちこなるを護れる、いともたふとし、神前に伏し拜みて、やがて女坂より降る、石段稍歩みやすし、市中

に出て、神代より傳へたる鹽釜といふを見んとて行く、釜は町の中程にありて、こゝに神社あり、其の傍に柵もてかこへるは、是なん神代の釜なりといふ。釜中には金錆の如き水をたゞへ、形は大にして其の數四あり。果して神代のものにやいかゞ。見をはりて宿にかへり、しばし息ひ、汽車にのり、仙臺につく、まづ旅店をさだめ、かひ物とゝのへんとて、宿を出て、市中を散歩し、夜に入りてかへり、八時頃臥す、明日早く直行の汽車にのりて、東京に歸ると思へば、いとたのもしくてなん。

翌朝六時半の汽車にのる、途に幾多の停車場をすぐ、白石と聞きて、維新のとき奥羽諸藩の向背をこゝに定めしを思ひ、福島と呼びては、忍の里の尚忍たる會津の籠城を思ひ、古き石がけの尚あるは、白川の城あとなり。關所も、空しく名のみとゞめて、今は大御代のみめぐみをうけ、心安く千里の外に旅することそ、いとありかたけれ。名須野が原の廣き野を打ちすぎ、宇都の宮に着し、都の近きを喜べり、たそがれ時、上野に着く、直ちに車にのりて下谷なる親戚の家に入りぬ。

數日をすぎて、病少しくをこりぬれば、また、くすしの勸に隨ひ、暖地をえらびて療養せばやと、遊ぶべき地を求む、熱海はいかに、大磯はよからんと、人のそゝのかすれば、彼地は皆、遊ぶ人多くて、さわがしければ、みづからえらみて、房州北條へと志し、廿六日の朝、船にのりて靈岸島を發し、黃昏北條へつき、旅宿を求めてやどりぬ。朝に陸奥の雪をふみて、夕は房州の海波を友とす。身はしばらく北條の里にすみて、病のいゆるをまつのみ。房州は、名所古跡も多しときけど、病を養ひつゝ、とひたづ

ねて、未だ遊ばさる、雛たちの枝折にせんこそ、余が消閑のあそびなれ。名づけて、養痾漫筆といふ。

明治三十年に神無月　　親々齋屋主人しるす

旅寝の夢

晨には由井が濱邊の波の音に昔を忍び、夕には大藏山の月影にすぎにし跡をたづねて、思はずも一日二日をこの鎌倉の里にすぐしつ。

今宵は春雨いとしめやかにふり出でたるに、心地さへ例ならねば、暮を果てねども臥床に入る。ひごろのつかれにややがて夢路に入りたちぬ。

梢を拂ふ風、窓打つ雨に驚かされて、ふと目さむれば、かなたの一間に人のさゝめく聲す。あないぶかし、わが外には人もあらざりしにと、やをら起き居できけば、左馬頭は今宵こゝを落ちさせたまひしときゝつるに、伊賀守にはなど獨り留まりたまふかといふは、此の家の主人にて、いぶかりたまふも理なり、これには子細の候といふは、いといかめしげなる武士の聲なり。主人其の子細はといへば、かの二楷堂の奥に押込めまつれる兵部卿の宮の上なりといひて、一きは聲をひそめぬれば聞えず。しばしありて主人は膝をはたと打たゝきて、しからば今宵の内にかの宮をといはむとせしが、武士は聲高しとあたりを見廻はしつゝ、又もやしきりにさゝやきぬ。

今宵の内にといふをきゝて胸とゞろき心まどひぬ。いでをどり入りて誅せむと、枕元なる太刀とりて障子のもとに忍びよりぬ。さて又思ひかへせば、今これを誅したりとも、直義よもや宮をば助けまつらじ、こゝにも宮方のものありときかば、却りて禍を早くせむ、しかじ、二楷堂の奥に宮をたづねて助けまつ

らむにはと、心を定めて、やがて雨風の音にまぎれてこゝを忍びたちぬ。足にまかせて行くほどに、いまはけはしき山路にかゝりぬ。麓の方を見かへれど、いみじう暗くして、墨を流したらむやうなる、鎌倉の方はいとしづかなるに、たゞこゝかしこに篝火の三つ四つほの見ゆ。たゞ何となく賊やおひ來と胸とゞろかれて、又も暗き蔦の細路に分け入るに、峯よりおろす夜嵐の物すごく、梢をもるゝ雨のしづくいとわびし。行きゆきて暗き谷のほとりに出づ、路は絶えぬ。まよひけるよと、あたりを見廻せど、雨雲深くとぢて、登らむ路もなし。こは如何にせむ、とく告げ參らせでは、おくれやせん、あはれ神も佛もかゝる孤忠をあはれみたまはぬかと、天を仰ぎ、地ををろがめど、應ふるものはたゞ谷川の水の音のみなり。をりしもあれ、梢にひゞく笛の音色、いと近うきこゆ。あないぶかし、鹿猿ならではすむものもなきこの深山にと、側耳そばだつるに、あはれに忍ぶ故園の曲、忽ち高く忽ち低し、絶ゆるかと思へど又續き、續くかときけど又絶ゆるが如く、谷を渡り木だまにひゞきて、いとかなし。いづくいかなる人の調か、はた我がたづねまつる宮の上か、宮は笛の上手にはしまして、富士といふなる横笛を愛でさせ給ふときゝはべれど。今宵や君を慕ひ國を愛ひたまひての心やりなるらむ、こよひにせまる御命とも知らせたまはでと、しとゞ涙にくるゝほどに、又一際高くひゞく笛の音に心をおししづめて、岩根こゞしき坂路を、のぼりつおりつ行くほどに、笛の音は頓にやみぬ。あなおぼつかなと路のかたへの松が根に腰打すゑて、行く手の方を見やるに、いみじう繁れる梢の裏より、ほのぐらき火影のもれくるは、まが

ふかたなきかの土窟なるらむ、きゝしにまさるいぶせきさまかなと、胸先づつぶれて足も進ます、あはれ尊き御位にも登らせたまふべき御身ながら、かゝる深山の、奥にとらはれの身とならせ給ふとは、そもいかにぞや、こも皆尊氏兄弟がしわざか、思へば腹たゞしや、おのれ世にあらむかぎりは、いかでか御うらみをはらしまつらではと、覺えず聲立つるに後ろの方に人ありて、曲者そこ動くなといふ、驚きて見返れど、雨夜の月の影暗くて、さだかに、見わかねども、年尚若き女なり。我は西國の微臣、必ずあやしきものにては候はず、今宵にせまる我君の御大事を告げまゐらせむとて參り候といへど、女は驚きたるさまにて、我君の御大事とは心もとなし何事ぞといふ、この女何者ともしられねど、しばし、ためらひぬ。女はそれとや推しけむ、妾は都より宮に隨ひまつりて下りし雛鶴姫なり、御大事とく語りたまへといふに、心はじめて解けて、ありつることのあらましを物語れど、いよ／＼驚きて、其は誠かといふ。何とていつはりをも申すべき、とく宮にきこえあげまつりたまへ、斯てあらむほどにも賊も來もやせん、とく／＼とうながせど、妾はこれより宮にきこえ上げまつらむ、君はかなたの谷なる理智光寺に行きて、長老にことのよしを告げたまへ、長老はまことにたのもしきものなりといふ、をりから麓の方さわがしく、篝火さへほの見ゆれど、はや賊來ぬめり、とく宮の御伴してこゝをおちさせたまへ、我はこゝにて賊をさへぎらむといへど、いなとよ、かしこに見ゆるは宮を警固の武士なり、心になかけたまひそ、とく行きたまへ、此處にありて疑はれたまはゞ、かへりてあしからむといふに、心はこゝに殘れども、さらぬと

て麓の方に馳せ下りぬ。遠からねば、やがて理智光寺にいたりつきぬ。はや曉近くなりぬらむ。護摩堂の方に木魚の音かすかにきこゆ。ほと〳〵と門打敲けば、木魚の音はたえぬ。しばしありて人のいづるけはひするは、長老なむめり、いと氣高き老僧珠數つまぐりつゝ出で來て、誰にておはすかと門ひきあけぬ。おのれは西國のもの、こよひしかじかの事ありて參りつといへば、いたく氣色をかへて、そは御大事なり、いでとて、法衣のまゝに太刀を帶き、つゞきたまへと云ひ捨てゝ、二階堂の方をさして馳せ行く。後れじとつゞくに、御座所の方にあたりて、女の泣く聲聞ゆ。さては賊はや來つらむと、胸とゞろきつゝ、ひたばしりに馳せ着きしに、あなおそかりし、宮ははや賊の手にかゝらせたまひし後なりけり。

おくれてけり、あなくやしと、足ずりすれどかひもなし、姫もいたでを負ひて、かなたの木影に倒れて息も絶え〴〵なり。藥籠など取り出して介抱するに、忽ち眼をみひらき、おのれ逆賊と呼ばはりつゝ飛びかゝらむとす。老僧あわてゝ抱きとめ、雛鶴姫よ、早まりたまふな。われは長老なり、かの人も宮方のものなり、心をしづめたまへ、といへば、姫もあきれたるさまなり。おのれ聲をはげまして、宮はいかに、賊はいづくへと問へば、たゞおそかりし、口をしとて泣き伏しぬ。折しも雲間を縫ひて走る片われ月、かすかなる光をもらしてかなたの繁みを照らしぬ。ふと見れば、あやしげなる武士の影うごめけば、これこそ、宮を討ちたてまつりし逆賊なれと、僧とともに、けはしき山路を追ひ行くに、曲者ども、はやくもそれとしりたりけむ、忽ち影をかくしつ。いづこまでもと追かく

るに、如何にかしけむ、足ふみはづして、そこひもしらぬ谷底に落ち入りぬ。あはやと驚きて頭をもたぐれど、身は孤燈の下にありながら、こは昔を忍ぶ夢なりける。外面を見出せど夕より降りつゞきし春雨、やう〳〵晴れ渡りて、曉月西の山の端にさやかに、時鳥のいと近う一聲二聲なのるいとあはれなり。

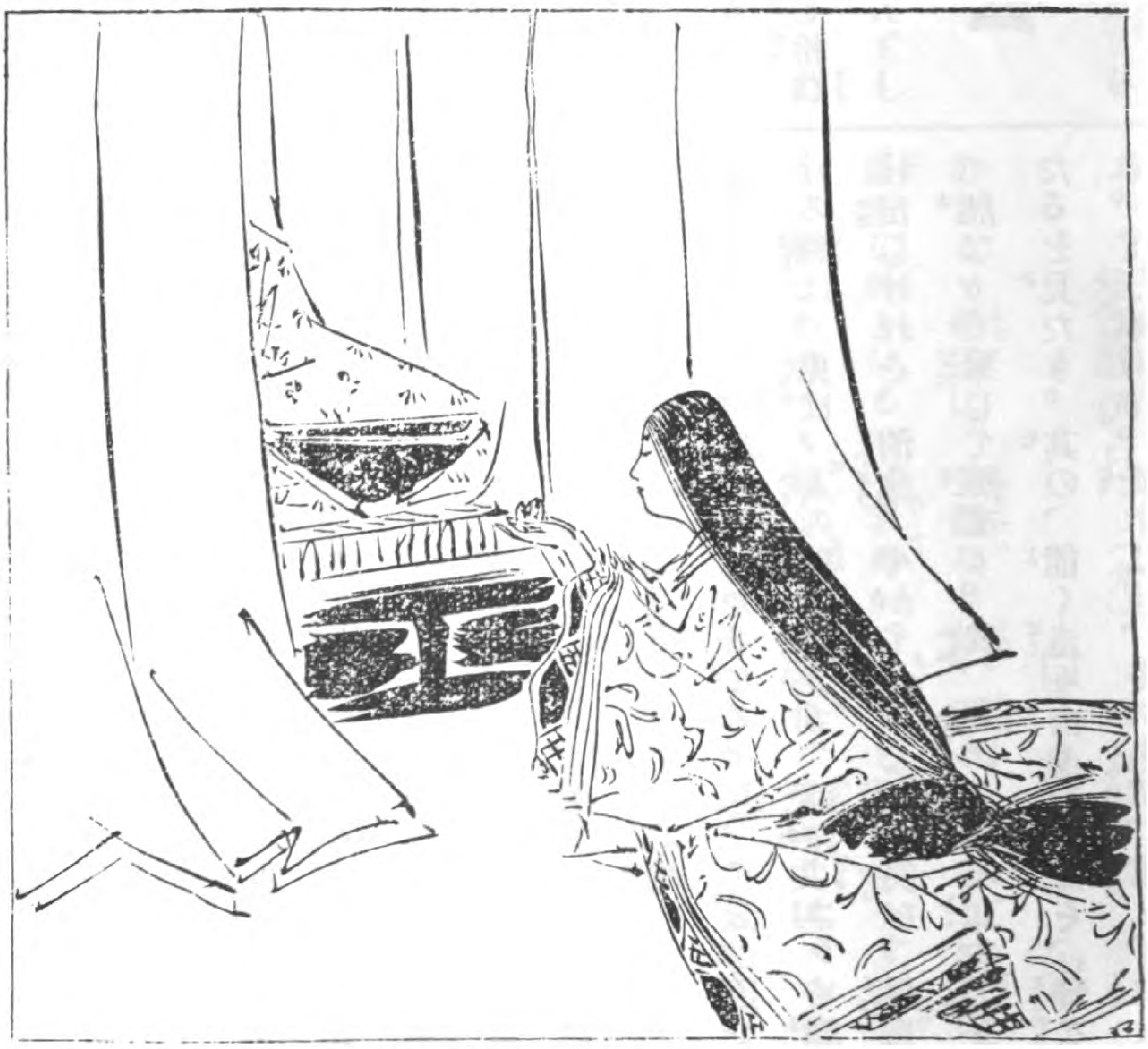
丁酉五月相州鎌倉の里にて　周南　小史

才くらべ（十二）

蓬生屋女史

廣幡御息所

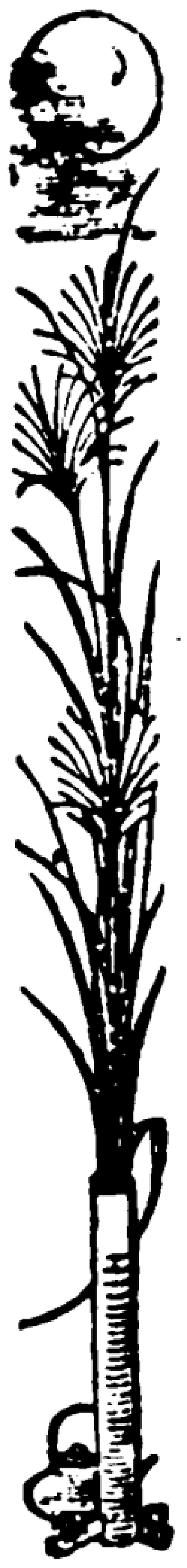
廣幡御息所と稱へまつるは御名を計子と申し、源中納言庶明の女にて、天曆の帝の更衣



なり。此の君、頗る才識なりけり。ある日、帝、御物を召させ給はむとて、御たはぶれに、

あふ坂もはては行來のせきもせず
たづねてとへよきなむかへさじ

と云ふ隱歌を作り給ひ、之を宮人等に示し給ひて、試みさせ給ひけるに、皆解し得ず、或は召すとなし、よそはひと〻のへて進むものなどありて、むかしがらせ給ふ中に、ひとり計子はさとくも其の意を解し得て、薫衣香を獻に奉りぬ。帝をはじめ、ありとある人、みなその才智のほどを感じあへり。其敏慧なること、よろづ此の如かりしに、帝もいたくよみし給ひけりとぞ。



笑話（奇談一笑）つゞき　か、み

清藏が兎

近江の國、蒲生の郡、なにがしの邑に、清藏と云へる男ありけり、一日、薪を採んとて、山に入りけるが、適、兎の、路の邊に臥し居たるがありて、少も動かざりけれど、之を見出し人々も、皆、死にたる兎なるらんかと疑ひてありけり。清藏、之を見て、遽に、鼻を打掩ひて、あな臭し。あな心地わろし。意ふに、已に、腐れ爛れたるなるべし。と云ひ出でける程に、兎は、人の聲に驚きて、遽に、さッと驅け出しけれど、清藏、やがて、手を拍て笑ひ、果して然なり。果して然なり。我、先に、彼の耳の動きたるを見たり。其の、能く走り去りたるこそ、理なれ。と云ひけり。此れより、その邑人、常に、口に

まかせて、よき程に云ひ繕ふことを、清藏が兎とぞ呼び爲しける。

源五郎鮒

近江の湖に、龍ありけり。或時、天に上らんとしける折、鮒ども、數萬集ひ來りて、龍に縁りて、共に、天に上らんことを求めて止まず。龍もとゞめ難くて、やがて、鮒どもをして、おのも〳〵、その鱗を咥へしめ、翔け騰りて、已に、中空に至り、顧て、鮒どもに向ひ、天も、はや、遠からず、汝等、愼みて、口な開きそと警めけり。鮒ども、纔に、唯々といらへけれど、口、はや、開きて、はら〳〵と、雨のごとく降り下りけり。其の下に、錦源五郎といふ者ありて、悉、その鮒を獲へ、之を鬻ぎて、甚く、家を富しけり。今、源五郎鮒と云へるは、此時より名づけしとなん。

須磨の月（九）

白魚女史

あきるゝ船子に、生體なき姫、互みにしばしは言の葉もなかりけるが、乳母が、元にと引きかへすを見て、姫はあわてゝ起き上り、乳母、妾も共に、もとにかへりて、父君の御意にそむかず、捕はれまはし、乳母のう、生きて甲斐なき玉の緒をしみて何かせん、のう乳母、もろともに呉し返せよと泣きさけべど、彼方は狂亂、矢玉の如く走りて物云はず、はるかに見かへりてまた三拜、天を拜み、主を拜し、船子に賴む姿、天もあはれと見てにや、又一しきりかきくれて、時雨に姿も見えず。泣きつ、さけびつ、之も狂氣、はては走り出んとする姫を、流石に船子は押ししづめて、そも如何なる御身の、如何なる御事のおはせぜ、からあわたゞしく



は亘らせ玉ひし、物語り玉へ、仔細語り玉へと云へど、姫はまた船底に仆れたるまゝ御答へも泣くばかり、たゞ、乳母具しかへせよ、よし罪なきにもあれ、父君の御意をそむきては不孝の罪の誠にかゝらんものを、のう乳母具せずや、具せずば一層、此川にと云ひざま姉姫が起ち上れど、妹もれくれず、もろ手合して、互みに水底にとび入らんとするを、船子はいよ〳〵あきれまどひながら、しかと袂をとらへ、あなやあぶなし、何をさやうに死ぬまでに思ひ入る事やれはする、まづ語り玉へ御姿よりかんたせ、如何にもやさしう貴人と見奉るものを、如何でだゞにやは死し参らすべき、まづ仔細を告げ玉へ、語り玉へ、人をなまどはせ玉ひそ。如何なる御身、如何なる仔細と問ひすがる折りから、捕子数人、やは、姫は彼の船にれはせり、何處の船子ぞ、姫君を渡し奉れ、大領殿の御下知ぞ、そむきて用なき罪なかうぶりそと大聲に罵る聲音より、物のふるまひ、如何にもあらげなるに、仔細を知らぬ船子はれびやかし人と見てにや、そのまゝ綱を切つて漕ぎ出せど、天、ものを云はず、たゞ順風に押し流せど、浪も潮もみなぎり助けて、さす棹かろく、まばたくひまに岸邊を離るゝはや幾丈、其船かへせ、もどせと人々のさやぐ聲は、浪を吹き立てゝいよ〳〵船をやるが如くなり。

父君の御仰せ、妾は罪あるもの、元の岸によせて、彼に亘してよ、さらずど、汝までも用なき罪かうぶらん。彼れに漕ぎよせよ、元にかへせよと姫も共にさけべど、浪と共にかき消して、船子は耳にもかけず、袖をとらへて彼方へとあせれど、船子はなほたゆまんともせず、ますます掉さして急がするに、姫は聲

も力もよわりはてゝ、船底にしづみ入り、また人心地もなし。

夢か現か、昨日か、今日か、此處何處の浦か、島か、まだたゞ〳〵思はるゝは妹姫、姉姫ははや玉の緒もたえて、しら浪のよせし、みぎはも、岸もしらぬを、鹿子はおどろきながら、甲斐〳〵しく抱き起し、背に負ひ、切れたる、綱して、十字に結びつけ、まろびなく妹姫を引き起して、急ぎ導く苫屋、親分は歸られてか、嫗は居られてか、いたくさわぎわりたり。權内なりと呼びながら、裏か、庭か、面廣き方にまはりぬれど、れう權内か、何の獵のありて、さやうには仰山なるぞと、内には嫗の答のみして、出でも迎へねは、日來馴れたる中とはくまれぬ。此處、此の屋は海士が頭人の住家にて、此浦にも聞えたる家なり。權内づか〳〵内へ入りて、獵などあらでこそ、嫗よ、氣絶えたる人を伴ひたるなり、早く、何か、氣付けをとて、結びし繩ひきとめて、かき下す姉姫に、とりすがりて、せんすべなく泣きまどふ妹姫、見るより嫗もおどろきけるが、そも、それは大變なり、こや、誰にても水をと呼びたてなどし、己れもあわてゝ氣付藥とり出し名は何とか呼ぶ、こや女子しう女子しうと、息のねかぎり、一心に呼びさけぶ人の誠の耳に通りてか、やう〳〵心付く松風、眼をみひらきて、あたりを見まはし、此處は何處ぞと虫の音に問ふ音悲しく、須磨の浦わとはるかに聞きて、なかなかに心すまぬげにて、とりすがる妹姫を見やりて、はやも袂をしぼりけるぞあはれなる。



文林



森時雨　　近衛忠熙

神無月きのふも今日もしぐるれど
　はゝその森のいろはまさらず

對菊待月　　久我建通

たそかれの菊のまがきに立ひとは
　やがてもいづる月やまつらん

夜落葉　　鍋島直大

しづかなるよるしも分て庭の面に
　落る木のはのたゞすきこゆる

月前時雨　　高崎正風

久方のつきはもみぢにわかねども
しぐるゝたびに照まさるらん

瀧邊紅葉　　長岡護美

霧迷ふたきのあたりのもみぢ葉は
　しぐれふらねど色こがれけり

寒蘆　　諏訪忠元

吹きはたる風に穂並のみだれつゝ
　さやぐも寒しきしのあしはら

行路霜　　竹屋光昭

をさゝ原昨日のつゆもたきそへて
　行みちさむくしもぞ見えける

山菊　　宮地厳夫

紅葉は散かゝれどもやまきしに
　うつろふべくも見えぬ菊かな

月前菊　　小出粲

紅葉のにしきはくらきつき夜にも

ひとりさやけき白きくのはな

林紅葉　鎌田正夫

散たるもふみはくる迄なりぬれと
はやしのもみち猶さかりなり

田上紅葉　遠山英一

水たまるかりたの面のをちこちに
くろの紅葉のかけそうつれる

色　師岡正胤

源のあやふみ見れはむらさきは
ことはの色もかへなかりけり

月前萩　井上頼文

久かたの月よりれろずわきかせを
さやかに見せてそよく萩かな

浦落葉　三輪義方

浦風にみたるゝもみちうちよする
浪のはなにもましりけるかな

松不改色　三浦千春

うつりゆく世のさか山に生ひなから
松はいろこそかはらさりけれ

冬のはしめ　下田義天類

冬近くなりにけらしな朝手あらふ
つゝゐの清水やゝぬるみつゝ

月　菊地眞澄

れはそらの月にむかへはもの思ふ
こゝろの隈もすみわたりけり

殘紅葉　足立正技

冬かれし木立のひまにいろみゑて
淋しくのこるみねのもみち葉

浦擣衣　嵩野隆道

てるつきの清見か崎にひゝくなり

三保のうらわのきぬたうつ音

野逕霜　蜂須賀隨子

いつしかも霜ふむ頃となりにけり
露をわけたる野へのかよひち

紅葉散　鍋島榮子

散はてゝにはの芝生にもみちはは
いまひとさかり錦しきたる

無風落葉　柳原愛子

風たえし夕へのにはにふたつみつ
木すゑはなれてちる紅葉かな

菊映月　小池道子

かをりのみ風にのこりて菊のはな
月のひかりになれる夜半かな

菊帶霜　北島以登子

菊のはなうつろはぬ間に折はやと
れもひしものを今朝のはつ霜

曉落葉　諏訪晴子

ありあけの月影さむくさすまとに
ふく風さえて木の葉ちるなり

山路尋菊　保科節子

もす鳴て木の葉ちりしく山みちに
尋ねえてけりしらきくのはな

草庵紅葉　松平健子

かくれすむくさの庵も目にたちて
紅葉のころはひとそとひける

籬殘菊　南郷柳子

殊さらにあはれなりけり霜かれの
ませかきにのこる菊のひともと

愛菊　坂田泰子

れのかてにやしなふ菊は色も香も

分てまされるこゝちこそすれ

雨中菊　服部磯子

をやみなく雨はふれともさきゝ匂ふ
籬のきくはうつらさりけり

松間月　内田遊歌子

雲はらふ松のあらしもしつまりて
木の間の月のかけそさやけき

夜砧　安東菊子

里の犬のこゑものすこくふくる夜に
ねふらてたれか衣うつらん

忠のことは　福羽美静

忠といふは、おの〳〵其の君につかふるの道にして、我か日本は、すなはち、萬民たゝちに、帝室國家につくすことこれなり。萬民おの〳〵、とる業にたかひはあれと、共に國家の大御寶にして、いつれの人たりとも、その身をかろしとすることなく、事あるときは、おの〳〵身をつくし、ことなきときといへとも、時代につれて、みな歩をすゝめ、人力も地力も、その度をのはらしめ、價直を高くなす、これみな忠道にかなへるのものなり。

國のため心も身をもすゝませて
つくすまことそ人のまさみち

砧聲　山川清素

さわ〳〵と渡る夜風梢を洩れて、板戸鳴りきしめく折、明滅たる燈火を守りて耳をすませぞ、糸の如くほそく、毛條の如く微かに鳴き枯れて、わひしらに聞きなさるゝ虫の聲をもうちまじへて、聞ゑ來る細けれと、長く微かなれとも、冷かに、耳より腸に、腸より心の底に傳りて、千々のおもひを起さする、斷腸のひゞきとはこれなめりかし。

秋といふものゝ、下には風のそゝきも心にかゝり、虫のかことも耳にさはり、あるは、さえたる空に雁がねのすみ渡りたるさびしき夜半に星の光のまたゝきたる一として断腸のたねならぬはなき中に、をりからとはいへ、所からとはいへ、うちしきるきぬたはかり、いかなれどかくは、深き思を心の底にれこさする。

千里一白の光をしきて、月にうつひゞき、小暗き燈火のかげをたよりて、藁屋のむしろにたゝく音、あるは、冬のいそきに、暁の夢をも結ぶいとまのあらで、夜すがらいたつくをみなもあるべく、或は、長き旅路の夫を待ちかねて、涙ながらにうちあかす妻もあるべし。聞え來る音かすかなりとて、うつ人の心の底は、たどり行くひゞきの末にも推量られ、槌もつ人のあはれさは、たゆみある音のひまにもしのぶるゝものを。

かことがましき虫の音、哀しからぬにはあらず、羽をかはして鳴き渡る雁がね、あはれならぬにはあらず。されど、其れにはまことさる心ありて、人を泣かしめむとはせざるべし。されど、このきぬたの音はかりは、人によりて傳へられ、しかも、其の音の人多くを言ふべからざるあはれさのひそまりて、内に迫るを覺ゆるをや、人情この糸になれたるもの、誰かは心の動かざるべき。あはれ、きびしき鐵の鎖よりも強きは、このほそく長きひひきの力なりけり。





雜報

●天皇陛下　さきに御風氣にておはしませしよし記しまつりしが、去し十八日のころには、まつたく御爽きたまひて、もとの大御身にかへらせ給へりとぞ。うれしきかぎりなり。あなかしこ。

●今更ならねども　陛下には、ふかく御政に御心をよせ給ひて、朝つとめてより午后の二時三時がほどまで、例の玉座に出御ましく て、何くれといとつむらかにみそなはしきこしめさせ給ふとこそ。臣民として、たゞに爲すこともなくて、暖に衣、飽くまで食ひて、さてのみあるべしやは。

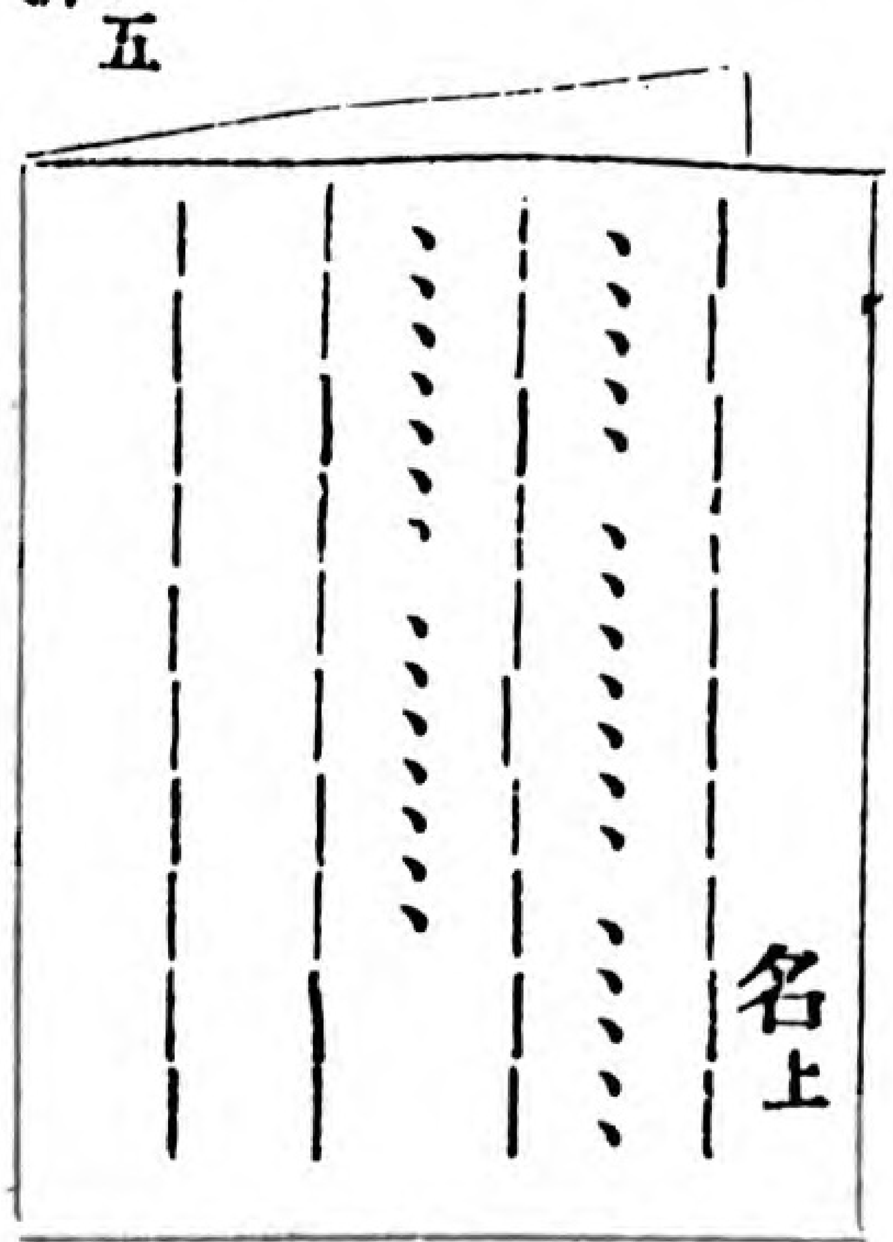
●歌御會始御題　明治三十一年歌御會始御題は、「新年雪」と仰出され、詠進書式、幷に期限等、左の通り定められたり。

料紙は、檀紙、奉書、杉原紙、又は美濃紙を用ふべし。

詠進期限は、一月十二日まで

竪詠草

但シ五ツ折



裏面書式

某府縣下某國某郡某市某町村住

華族又は平民士族

苗字名

（官位勲功及有爵者は苗字の上に記載すべし）

●女子高等師範學校長　秋月新太郎氏は、非職を命ぜられ、高嶺秀夫氏その後任を襲がれたり。去し十九日のことなり。

●高等女學校　去し明治の二十年前後のころ歐化

主義いたく世に行はれて、その内には、よきがあり、あしきもありしが、そのころ高等女學校もこゝかしこに起り、いと盛りなりし、さてその二三年の後は、反動によりてか、女學校もふるはずなり、縣立師範學校の女子部すら廢止となるもありて、たゞ宗教主義の女學校と、二三の都府のみのこれり。當今戰後女子教育の必要をさとりて、師範學校女子部を復興するなどはあれど、公立高等女學校は全國にただわづかに八校あるばかりにて、此外に宗教主義の女學校はあれども、これは整頓せずとにはあらねど、多くは外國人によりて教育せらるれど、たちゐさへ外國風を倣ふかたぶきありて、卒業の後、日本風の家庭を修むるには、不便すくなからず。されど、目下全國適宜の地に、公立高等女學校を設くべきは必要のことなるべしといへり。これはさることなり。

●**文學家美術家雜話會**　は、去し二十三日、東京上野精養軒にて開會せり。來會者は、前田健次郎、橋本雅邦、福地源一郎、依田百川、岡倉覺三、三宅雄次郎、坪内雄藏、柳原義光、小笠原長生、落合直文淺井忠、安藤仲太郎、松本君平、佐々木信綱、幸田成行、鈴木利兵衞、都筑馨六等九十八名にて、なほこれよりは隔月に開會すべしといふ。

●**けなげの少女**　備前の國上道郡財田村の山田新次といへるが次女某は、小學校の授業料を父母より貰ふが氣の毒さに、編物をして、其の賃金を得ては、之に充つといふ。さて試驗毎に、學業優等賞を受くとは感ずべし。足はぬものなきまで、強ても父母に受けて、さて落第するもあり。この少女を見てかゞみとせよ。

●**小學校の女子教育**　昨年にくらぶれど女生徒五

割の增加なりといふ。

●市町村立小學校の授業料　去月十日勅令にて公布せられたり。明年四月一日より實施すとなり。市町村立尋常小學校授業料は一ヶ月金三十錢以内とし土地の狀況に依り地方長官之を定む。高等小學校の授業料は地方長官之を定め文部大臣の許可を受くべし。

●鍋島子爵北堂の卒去　貴族院議員鍋島直彬子の北堂、朝春院朝子は、八十八の齢を享けて、去月六日、舊藩地肥前鹿島に於て卒去したりとぞ。夫人天資恭謙風姿閑雅貞淑の譽高くして、尤も慈愛の心に富み、而して身を持すること嚴正、其の能く高齢を保ちしは、平素規律正しき生活を守りしに因ると云ふ。夫人の素行中特筆すべきは、直彬子幼時の教養なりとす。直彬子は幼にして父を失ひたれど、夫人深く心を其の教育に用ゐ、先づ婦人の手に男兒を保育するの舊習を破りたり、此一事到底尋常婦人の及ぶ能はざる處、直彬子の今日ある、全く母堂の賜と謂ふべし。鹿島の舊藩士藍田谷口翁其德を頌して曰く「八旬不老因兒孝、名望逾高爲母賢」と、蓋至言なり。夫人平素健全、曾て藥餌を近けしこと無りしが、去十月十七日より遽に中風症に罹りたれど、直彬子及夫人龝子、始終其枕邊に坐し、自ら看護の任に當り、舊臣の士女、亦來りて之を扶けたり。されど、天命如何ともすべからず、終に其卒去を傳ふるに至れり。舊臣訃を傳て慟哭、相戒めて音曲を停止する事週日に及べりといふ。

●此の言吾人の意を得たり。　京都府教育雜誌いふ、

教育家の蓄妾論　近代有名の教育家湯武居士學萱百話といふを物し後なき人の蓄妾を不德義にあら

ずと論ず敢て問ふ後なきは獨り女子のみの罪なりや否や若し假りに一人の蓄妾にて猶且つ子なくも三人五人差支なきや否や又問ふ子なきを口實として一人娘が壻男を始むるも不德義にあらざるや否や更に問ふ一國男女の配合は自然の妙用殆んど相半せず知らず居士は此の調和を如何せんとする

女子の再婚論　元良博士は學理上より福澤翁は實際上より共に或場合の再婚を以て至當なりと論ず議論としては何れも敬服の外なし唯憾むかゝる議論は世間幾多不貞の淫婦に好辭柄を與ふるに過ぎざらんことを獨り迷惑を感ずるものは風敎維持を以て自任する敎育實務家のみ

と、此の言信に吾人の意を得たり。世に學者と稱せらるゝ輩、往々斯の如き議論を上下して自ら喜び、稍もすれば社會の安寧秩序をみだざんとす。恐るべき哉。

●友禪染の元祖　は加州金澤の畫工友禪といふより起りしにて、舊金澤藩士森田柿園翁「續々漸得雜記」第十二に記していふ。

或人云ふ、今世上に友禪染と稱するものは畫人の友禪より起ると、友禪は舊藩徵妙公(松雲公なるべし)の頃の人なるが、友禪が寫せる菅公の畫像を前田源隨に賜ふとあり、然らば萬治以往の人なること著明なり、友禪染と云ふものは友禪が彩色畫に摸したる染形とかにて呼初たるか、按ずるに友禪は書畫一覽畫家の部に云ふ、友禪、姓氏未詳其先畿洛清水奥の院にあり萬寶書畫全書に曰く、友禪姓氏詳ならず、設色の畫を善せり、初め光琳を學び後ち一格をなす、光琳は享保年中の人、江戸に住す、通稱雁金屋藤重郎云々。

●儉德　重野文學博士さきつころ、北海道よりはじめて、奥羽地方を遍歷し、到るところに需にまかせては、揮毫なとして、このほと歸京せり。さてその途次陸奥の弘前にて、とある旅館に、古下駄を忘

れ置きて、歸京して後思ひ出でゝ、はがき郵便にて、その下駄通運便に托してくれよとかきてやりしが、旅館のものとも、辛うしてさがし得て見れど、原價にて四十錢ばかりの古下駄なりしといふ。うはへをのみかさるめる今の世には………

●貞婦　和歌山縣紀伊國那賀郡粉河町（字上の段二千百六十五番地）に住める頓宮覺次郎の妻に、照といへるがあり。ことし卅九歲なり。十九歲の年この覺次郎を婿とせしが、二年がほどを經て、覺次郎ふと病にかゝり、果は足腰たゝず起きふしもおのがまゝならぬばかりになりしを、妻は心をはげまして、看護おこたりなく、女の手ながらいさゝかの田地を耕しなどしてその日を送り、十五六年がほど一日としておろかならず。始終一日の如くなりといふ。去し明治廿四年のことなり、前の陸軍々醫總監松本順氏この地を歷遊して、この粉河町なる某がもとに宿りて、不治難病のものあらば診察治療すべしといふをきゝて、夫を籠に乘せて、いたりて施術を受けしに、さばかり不治の症といふにもあらねど、なほ怠りなく療養しなば、全治せずともあらじといふに大に力を得て、いよ／＼看護に力を盡しゝが、かひありて明治廿八年の春のころよりは、覺次郎が病紙を剝ぐが如く心快き方に向ひて、二ケ月ばかりがうちに、人手をからで二三間がほどは歩行くを得るやうになりしかど、夫婦の喜び一方ならず。かくては四五ケ月を經ずして、全治するに至りぬべしとていよ／＼療養怠らざりしを、いかにかしけん、その夏のころより再びもとの難症にかへりて、またもやあがらぬに一度は力をおとしゝが、さてあるべからねどとて氣をとりなほして、一層看護怠らずとき

く、貞婦なるかな。この夫が病一日もとく癒りて、この貞婦が心をやすめんをのみ願ふになん。

●これも　亦女のよき鑑なり。山形縣東置賜郡大塚村の金子熊太が妻しゆんといへるは、性質温順にして、いさゝかも親夫の心にそむかず。さきに舅病にかゝりて枕もあがらぬに、しゆん姑と心をあはせ日夜看護におこたらず。力を盡しゝかひありて、全治したりしが、ひきちがへて夫熊太亦病にかゝりて全身不隨となり口をさへ得きかねど、文字をかきては夫の意をさとり食をすゝめ藥を煎るなど、舅姑につかへながら病夫の看護に怠りなきこと五年になれり。されど見るものきくもの感ぜざるはなく、知事にまできこえて、このほどその賞として木杯一つを賜へりといふ。

●恐るべし　北海道、龜田郡龜田村大字大野跡に住める天塚三作が妻つるといへるは、ことし廿八歳になれるが、去月一日出產して、まだ幾日にもあらぬその廿一日といふに、信州善光寺、京都本願寺等參詣を思ひたちて、夫婦うち連れて發足し、青森より汽車に乘りて上野につきて、さて公園にて共同椅子によりて、背負ひたる兒に乳のませんとて、れろして見れど、思ひきやいつか息絶えてありしに、いたく驚きて、京橋警察署にいたりてこのよしを訴へしが、警官屬托醫をよびて診せしに、こは母產後間もなきに、いたく汽車に搖られて發熱せしに、兒その乳汁を飮みたれど毛細管支炎を起して、かくはうせたるなりといふに、夫婦もはじめてそれと知り、涙ながらに、さるべき計をせしといふ。婦たるものは心すべきなり。

●胎兒化石す　あやしきこともあるものかな。長

崎縣西彼杵郡夫婦川郷に住める某が妻ことし三十四歳なるが、さきに廿二歳にて嫁ぎ、翌る年正月より懐妊の心地なれども、産婆をよびて診せしに、思ふにたがはず懐姙せるなりといふに、その後攝生おこたりなかりしが、臨月になりても出産はすべくもあらず。腹いよ／＼ふくらかになり、かてて發熱さへはげしくて苦悶することも半月ばかりなりしが、ふと熱もなくなり、腹も日々縮りゆきて、遂につねの身になりしが、ことし三十四歳まで十一ヶ年がほどは、何事もなかりき。さるをこのほど又も腹つねならぬ心地にて、長崎病院にいきて診を乞ひしに、醫一診して曰く、これは子宮外の姙娠なれども切開せずはかなはじといふに、熟議して遂に切開して摘出せしに、胎兒は成熟しながら化石したるものなりしといふ。外にしてはエジプトのピラミッド中には數千年前の人體腐敗せずしてありといひ、内にしてはむかし松浦さよ姫は夫の外國にゆくを悲み戀ひて石に化れりとはきけど、胎兒の化石はこれが始てなるべし。かゝることもあるものにや。

●我が國にて　醸酒に用ゐる米穀は一年がうちに凡三百六十四萬石にて、此の額にて、現今の陸軍を二倍に、海軍を五倍に擴張し、孤兒五十萬人を養ひ、大學校五十校を維持し得べしといふ。あなや。

●老爺道　土佐國高川村の和田嘉助翁は、自ら資産を擲て、四里ばかりの新道を開鑿して車馬の通行に障へなからしむ。里人之を徳とし、稱して老爺道といふ。

●長命の軍馬　第六師團砲兵第六聯隊には、當年二十八歳なる軍馬今尚健在せり、此の馬は、明治十年の役硝煙彈雨の間を潜りて、猛將猛士と死生を同

うしたるものなれど、紀念の爲めとて最と鄭重に愛養しゐると云ふ。

●川口鶴氏の談話　栃木縣高等女學校卒業生

第三回同窓會總會にての談話筆記なりとておこされたれは、參考にもとて、そのまゝをのせつ。

私は、先年、當女學校の漢文科を受持て居りましたが、學校が遠方へひけまして、私は出ぬ樣になりしました。其後、私が居りました以前に卒業なされた方にて始め、皆さん方が、同窓會と云ふを御設になりまして、私を客員の席末に御列し下されまして、總會の節には、毎も毎も御招を戴きましたが、其都度差支へて、不本意ながら御斷をしました、今日は幹事丹羽チヤウ子さんより御案内を得まして、始て此御席に出ましたは滿足に存じます。（中略）つゞきて御話にうつります、さて女子高等師範學校を初、あなた方の關係の學校で、卒業式抔に皆さんに對せらるゝ御演説には、賢母となれよ、良妻となられよ、良敎師とならるゝ樣にとの御訓誡が重の樣であるが、是は御女子方の御本分は、此範圍内で、一生の幸福を得させらるゝことが肝心でありますから、私も、深く、右の御心掛を第一と存じますし、又御兩親も、其御目的で學校に御出しになるのであらうと心得ます。ところで、私は、段々世の進むに從て、ゆく〳〵は、もそつと御女子方の生涯を高尚にしたい、私がしたいと思ふばかりではない、時勢がそう運ばせませう、尤今日から、男子の樣に、御卒業の方に、すぐ專門學をおそばせと御すゝめ申すのではない、何れそうなる御覺悟で、御先だちの方には、後進の方々を御誘導になる方針を御とらせ申たい、又其專門の内には、只今直ぐでも、御宅の御關係により、又はやつて見たいと思召す方には、造作なくはいれます學科が一つござります、此學科は、決して、嘉永時代、アメリカのペルリが渡來により輸入されたものではない、一千年の昔、王室の盛なる御世に行はれて、延喜式に出てゐる學科である、何でありませうか、段々に御話をすると分ります、其外にも、往々世がすゝみ往くと、女子の方が、何か專門でもなさらぬと、雜居などが始た曉には、あちらの婦人たちにひけを取ては御國體にかゝはります、御用心なさらねばなるまい、雜居の場合に、四六時中、常住坐臥、御國體を維持するには中々男子計では叶ひませぬ、女子の方と

唱和してやらねばならぬ、若も御女子の學問が淺いと、文字言葉を鵜呑にして、手まね足まねをするやうにならぬにも限りません、さうすると、十五六年ほど前の新聞にあつた樣に、同權の權を誤て擧と思ひ、擧を揮て良人に抵抗する樣に自稱女丈夫が出きぬにも限りません。そんならあなた方の專門には、先づ何がよろしからう、農科、商業、これはおとまはしにし、さて工科、法科、御婦人方の辯護士、技師、判官、政治家、これはいくら世が進んでも需用はありますまい、理科には數學など、たまかの仕わざがあつて隨分宜しからう、しかし理學士と女學生など云ふことは、以前新聞紙で大そう面倒であつたゆゑ、是もしばらく措きまして、さて文科に移りませう、文科の內では、國文學科が至極結搆と存じますから御一考を乞ひます、又外國の文學科も、外交家の妻君となられた時には、隨分よからう、但御注意申すのは、文學から小說の關係である、小說は大抵にしたい、下野には殺生石や、玉藻前抔、昔から、小說の材料は大分ありますが、小說に耽ると、實驗して見たいと云樣な、妙な考が起ると、それこそ大變であるから、一寸申します。哲學にもよいのがあらう、併是等の學科は、今すぐやつて見やうと思召す方があつても、敎へて御もらいになる場所がない、あなた方の大學、即ち今の高等學校の專門學部の樣なものでも立たぬ內は、まづ仕方がありますまい、是も、やはり御宅の關係から、ないにもかぎりますまいと思ふ見込もありますが、前編があまり長くなりますから、是で打きりまして、千年前の學科と申すことの概畧を本編として申上げましやう。但、本編と申ても、此御話で、皆さん一般を驚動すると思召してはこまります、前にも申した通り、御宅の關係にて、直にもやらうと云ふ御方が有るかも知れぬと存じて申すのであります、前に延喜式と申たは、典藥寮の處に、挨醫令と申すがある、其內に女醫博士と云ふ官名があつたと覺ゑます。女醫博士と申ても、女の醫者の博士ではありません。女の醫者を敎授する敎員さんでありあります、此地へは延喜式を持て來ませんが、以前調べたことがあるから思ひ出したので、全文の朗讀は出きかねますが、學期も定めてあつて、試驗などもあります、卒業の後は、大內で召遣はるゝ、啻の樣に覺ゑて居ります。其學科も、たしか低い程度で、今日の看護婦位の樣に見ゑますが、其頃は男の御醫者も、そんなものであつたらうと存じます。夫故、私は、今日と比較し、千年前にはあな

た方の專門學が一科あつたと斷言します、委細は延喜式をごらんになれば分ります、右の如く、千年の昔、女子に醫學を教育されたは、恐く吾邦の外にはあるまい、なんと日本女子の名譽ではありませむか、十六七年前の事であつたが、或人の話に、露國で女醫を教育したが、體格杯の關係もあり、外科術杯には不適當の所もあり、結句女博士は出來そうもなく、大抵になつて居ると云ふを女醫反體の人から聞きました、其位の譯であるから、海外にこんな開化のことが、千年前にはないことゝ存じます。さて、前に御宅の關係、又は自分の御好次第、直に出來やうと申たのは、醫師規則は男子を限てありませぬ、是は餘ほど深き御趣意があらうと私は存じます。夫故、御規則御發行以來、女子の受驗者が續々とあらはれ、私が東京に居た頃の話に、一期に三四十人あつたと申すことでしたから、今日では、餘ほど澤山になつたらうと思ひます。臨床實驗杯のときになりますると、頗る立派に出きるものもあるそうでございます。尤御醫者さんの令娘とか、嫁さんとか、藥劑師の姉妹とか、又は産婆免狀を得て居る人とか、いづれ藥臭い人が一番多い、夫で自然に經驗があるから、男子の藥物づくめの方よりまさることもあるのでありませう、又東京には、數へらる私塾もありますから、前の種類の方でなくとも、自ら務發して出らる人もあるそうでございます。そんなことを耳にして居るから、最初に關係云々と、私が前置に申てれきました、つまり、御醫者さん、初其筋の家に生れた方、又は此等の家にかたづからうと思ふ方々には極都合のよきことゝ存じます。

云々

●軍人百人一首　小倉百人一首にならひ、軍人一百名の詠吟を撰びて、歌留多に製れるいと面白き仕組なり。而して、歌は、たはく、彼の征清の際によみいでしものなれど、文字悉く肺腑より出で、目出度もの多し。少年兒童をして、戯遊の間にも、自ら愛國の至情を感發せしめ、且文武兩道の感化を與へんとする、有益多趣の玩具なるべし。新年のたくりものなどにも能く適へるものならんか。　正價六十錢

郵税十二錢　神田宮本町　叢書閣發賣

●附錄(ふろく) こたびは、明治三十一年女鑑月並兼題(めいぢねんぢよかんつきなみけんだい)の刷(す)りものをそへたり。

●正誤 前號雜報に掲載せし、三輪田眞佐子女史の女子教育要言に、秋月新太郎氏の校閲を經たるよし記せしは、仝氏の序文をそへられたるを筆者の誤傳したるなり。讀者諒してよ。

●明治三十一年女鑑月並兼題

一月五日 { 歌……隣家梅 / 文……年の始に富士山を見て } 十二月廿日〆切

一月廿日 { 歌……春曙 / 文……習慣 } 一月十日〆切

二月五日 { 歌……池氷 / 文……希望 } 一月廿五日〆切

二月廿日 { 歌……若草 / 文……盆梅 } 二月十日〆切

〆切期日に遲れたるはすべて沒書とす。

一月五日兼題の三才に限り、歌文共、天に、本社近刊、三輪田眞佐子女史の著にかゝる女子教育要言一部、地に雅文消息集一部、人に修身百首一部を、れの〳〵進呈すべし。

●女鑑月並兼題歌文書式

歌書式

用紙は半紙半截の事。題每に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中には二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名若しくは一音の漢字にて認むべし。

題　……………　……………　……………　住所　姓名

文書式

用紙は半紙二つ折の事。字体は鮮明に記し、句讀點を施すべし。

題　……、……、……。……、……、……。……、……、……。……、……、……。　住所　姓名

總て文字は分り易き樣、漢字は階書、假名は普通の平假名にて、個々に離して認むべし。書式に違ひたるはすべて沒書とす。



教の庭

十二月五日兼題　遠山雪

天　肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

夜もすがらさわし嵐のすゑなぎて
をちの高やまゆきぞつもれる

地　同所　田代綾子

はる〲とおその遠山みわたせば
ゆきより外のいろなかりけり

人　伊勢國飯南郡櫛田村　近藤ふく子

昨日までくもゐのよそにみし山を
ちかくなしてもつもる雪かな

秀逸（十首）

夕日かけいりにしあとに色みえて
峯の志ら雪暮れんともせす　金森とし子

うちひさす都にみてもさむけきは
ふしの高根にふれる志らゆき　佳山幾子

花もみちきそひしをちの山〱も
今朝はましろに雪ぞつもれる　美奈井芳子

山の端にかゝれる雲は晴れゆきて
ちかくも見ゆる峯の志らゆき　坂田きみ子

我か里はけふもみぞれて打わたす
をちのたかねに雪そつもれる　岡田陽子

雪ふりていとゞさやかにわかれ見
くもに隱れしをちのやま〱　降田滿起子

たなびける雲かとみてしとほ山の
かたちは雪にあらはれにけり　志岐榮子

窓し書も及はぬ今朝のけしきかな
雲井につゝく富士の志らゆき　今村穎子

さま〱の姿なからにふりつもる
雪たもしろきをちのやま〱　武田粲子

朝ゆにふめなれし遠のやま〱も
雪のすかたのめつらしきか那　宇高松子

（以下原稿到着順）

雪ふかき阿蘇のたかねなみはたせば
けぶりもさゆるこゝちこそすれ　木川里子

うちみやる目さへまばゆく成りに鬼
やままたやまのゆきのけしきは　吉弘眉子

見わたせばそれかあらぬか遠やまの
みねにも尾にもつもるしらゆき　浦井豊子

おほかたは雪にうもれしさほやまも
さやかにみゆるゆきの今朝かな　永井さい子

玉たれのなちのたか山あさ日かげ
ひかりまばゆくつもるしらゆき　佐々小琴子

はなもみちいつしか過きて見渡しの
やまくふかくゆきそつもれる　熊野静子

遠山はもみぢのころもぬきすてゝ
雪のはだへをあらはしにけり　高橋きん子

あまたたき遠やま見ればすみかまの
けふりのひまに見ゆるしらゆき　中山さみ子

こがらしに庭のこの葉のちりはてゝ
あらはにみゆるふしのしらゆき　羽田三緒子

かきくもり雪げのかぜの身にしめは
しろくなりゆくなちのやまく　河田いし子

こがらしのふきかふ每にましへけん
なちのやまくゆきそつもれる　中山路壽子

おしなへて降り散りけんうちはたす
なちのたかねは見ゆるしらゆき　木上辰子

木からしの風にくまなくそらはれて
さほやま雪のさやけくあるかな　稲原菫子

けふよりやきこりか道もたえぬらむ
なちかたやまにふれるしらゆき　内田繁子

春ならぬながめながらもかすみけり
くらはしやまのけさのはつゆき　住山靜子

夜をさむみあさ戸あくれは遠やまの
たか根ましろにゆきそつもれる　山本のぶ子

ながめやる野井さやかにわかれけり
かつらきやまのみれのしらゆき　津守吉子

しら波のたつかと見ればそれならで
はつゆきしろし佐渡のしま山　及川千尋子

ふきおろすあさかぜさむしなちの山
みねにも尾にもゆきはふりつゝ　綿野りき子

たへかたき夜の寒さにしらゆきの
ころもきにけりなちのたかねは　山本能子

千たびみて千度めつらしくもかせに
すかたきたわゝさなやまのゆき　輕部壽子

わすれては雲かとそおもふなちかたの
やまのたかみねにつもるしらゆき　西艶子

見はたせはなちのやまくしろ妙に
みねにも尾にもゆきそつもれる　田中ゑん子

詠むれは雪もひとつに見はわかて
　とほやままつにつもるしらゆき　木村きく子

こゝろもうつかせの楽きもうへなりや
　をちのたかれにゆきそふりける　小野その子

見渡せは日ことにつもるしろたへの
　ふじのたかれのゆきぞさむけき　石原宜子

ふりさけて見るもめつらし遠方の
　やまのはしろくつもるはつゆき　小野寺竹子

けさみれはうき立つ雲は消はてゝ
　ゆきにさやけきをちのやま／＼　谷口ふさ子

紅葉見に行きしところとおもへとも
　おもかはりせるゆきのとほやま　江口とみの子

打見やるこゝろもさむしをちかたの
　ころもてやまのゆきのしろたへ　弘田ゆき子

目もはるに見ゆるしらくも動かねは
　たかれに雪のつもるなりけり　松本幾代子

ふきおろすやま風さむくみにしみて
　をちのたかれにふれるしらゆき　山手てい子

さはわたる月かとばかりみよしのゝ
　やまのはろかにつもるしらゆき　永田たれ子

朝あらしさゝなみさむくふきよせて
　しかのとほやまゆきそかゝれる　士肥仙子

二見のうらよもあけ方になかむれは
　ふしのたかれにゆきそみはける　下村たけを子

隅田かはふくかせさはてかはつらに
　みゆるもさむしゆきのつくはれ　下村きた子

峰の上にうこかぬくもと見はつるは
　はるけきやまの雪にそありける　植田てふ子

けさもまた朝戸をあけて見わたせば
　いとおもしろきとほやまのゆき　吉田三千代子

冬かれのこすゑにまたもはな咲きて
　ゆきおもしろきをちのやまのは　士岐米子

はつみゆきはれたる空をみわたせは
　むら／＼しろしあまのかくやま　磯野たま子

遠やまにけさしろ／＼とかすみつゝ
　みゆるはみれのゆきにそありける　磯野こと子

白くものかゝるとみしはとほやまの
　たかれにつもるゆきにぞありける　永井まり子

むら時雨晴れゆくあさをなかむれは
　いつしかゆきのふれるとほやま　大槻よし子

時雨すときゝていれしか今朝見れは
　ゆきとほしろしをちのやま／＼　大槻薫子

朝日かけてりそふ不二のとほやまに
　ひかりまはゆくゆきそつもれる　名取正代子

袖にふくかせさはさはてとほやまは
　はやくもゆきのつもりぬるかな　吾妻ちか子

ふきおろすあらしはさねてしら雪の
ふりかくしたるなちのやま〳〵
諸井くら子

紅葉ちりゆきてかざしし木すゑさへ
ましろになりぬなちのやま〳〵
舘脇ます子

駿河路やはかりに見ゆるひさむろは
かさしのはなのふしのしらゆき
戸塚てつ子

たけかりにあそひ暮しし山ならむ
なちのたかねにゆきの見ゆるは
柳田里子

風はやみ木の葉みたれてなちかたの
やまはましろにゆきやふりける
池谷富子

きのふまでさやかに見ねぬ遠やまの
けふはましろにゆきそつもれる
政山智惠子

くもりにしきのふの空のあらましな
けささほやまのゆきに見るかな
橋本たつよ子

遠やまのまつの葉しろしきのふけふ
いく重ふりしくみゆきなるらん
玉井隆子

遠やまにふゆきたるらししろたへの
ころもかつぎてうちぞふしぬる
楠花雄子

けさみれはさわくこがらし音たねて
さほやましろくゆきつもれる
宇多田楊子

箱根やまもみちのうへにみゆるかな
はやしろたへのふしのしらゆき
松尾葭子

けさみれは朝日まはゆくかつらきの
たかねはゆきそあらはれにけり
岩本登久子

薄かすみたなびくばかりまがふなり
はれにしちらのゆきのさほやま
高島谿子

咲きつゝくはなさ見るまでさほ山は
ましろにゆきのふりつもりけり
酒井美佐子

しら雲のたちそふやまさおもひしに
はからぬみれのはつみゆきかな
榊原八千代子

昨日まで知らで過きしなけさみれは
はつゆきしろし比良のさほやま
佐熊つれ子

しら雲のたなひくさのみ見ねにけり
なちかたやまにゆきのつもりて
山根久子

大ひねや小比ねのたかねみわたせは
ましろにゆきはふりつもりけり
山本秀子

雲井なるふしの高ねをみわたせは
いつしかゆきはつもりぬるかな
西村さら子

こからしの音もさたねてあけわたす
さほやまのはにかゝるしらゆき
遠山たゞ子

きのふまでにしきさみねし遠やまに
けさめつらしくゆきそつもれる
遠山よしね子

花さまてみはやす宿さにおしひきの
さほやまのはにつもるしらゆき
遠山たゞ子

はるかなるくろかみやまに雪ふりて
いたゝきしろく見ねわたるかな
武藤いれ子

ゆふされはくろかみやまも風さえて
かすかに見ゆるみねのしらゆき　武藤志げ子

秋きりのへたてしをちのやま／＼に
いたゝきしろくゆきのつもれる　眞島千鶴子

しらくもとまかひしをちの山ごろも
ぬぎかへぬこそみゆきなりけれ　黒瀬すゑ子

紅葉はの散るをまちてやふりにけむ
をちのたかねにつもるしらゆき　三輪みさを子

よもすがらすさみし風はけさたえて
まだらにしろしみねのはつゆき　田中ひろ子

青／＼とみえしとほやまいつしかも
ましろになりてふれるはつゆき　田中美津子

なかめやる遠やまのはにゆきしろし
ふもとのさとやさむけかるらん　金原吉子

朝戸あけてをちのたかねを眺むれは
いとめつらしくふれるはつゆき　廣田とめ子

さゆる夜のしくれやゆきとなりにけん
をちのたかねにみゆるしらくも　岸田はつ子

さむ／＼し夜半のなごりに朝ぼらけ
とほやまのはのゆきを見るかな　續木香芽子

うなゐらがゆびさすまゝに見渡せば
をちの外やまにゆきぞ積もれる　岡澤りん子

きのふまておぼろにみえし遠やまも　田代艶子

今朝はましろにゆきもつもれる

物皆へばいきはましろに見えにけり
今朝しも知りぬとほやまのゆき　堀内敏子

三保のうら松のあらしのおとさえて
はつゆきふれりふじのとほやま　伊奈田鶴子

しかの浦みそろゝそらのかぜさえて
ひらのねとほくつもるしらゆき　加納きく子

見はたせはみどりの色もうつもれて
ましろになりぬゆきの八重やま　泉さい子

間近くも見えにけるかなをちかたの
やまてふやまはゆきのつもりて　仁保志ま子

しろたへのきぬをきしかと思ふかな
はるかにみゆるみねのしらゆき　小松不士子

なかめやる遠のとやまもきのふけふ
ゆきにまちかくなりにけるかな　屋敷高繁子

きのふまで残るもみちも見えつるを
眞しろになりぬゆきのとほやま　城利惠子

高さのゝすだれをかゝげてけさみれは
はつゆきふれりをちのやまのは　下元もと子

今朝みればふもとみぞれて見渡しの
をちのたかねにゆきふりにけり　近藤好子

みよしのゝ山のこずゑをふゆ見れは
はなと見るまでゆきぞつもれる　白石梅子

ふるゆきに越にはあらぬくにまでも　近藤まき子

みなしらやまとなりにけるかな

おもほえずけさとほやまにはつみ雪
はしめてみるぞうれしかりける　岡松たか子

もみぢ葉の皆ちりはてしあしたより
ゆきのはなさくなちのやま／＼　野中わさ子

ちゝぶ嶺にはつ雪ふれりこのあした
みまへのな際はたれかまくらむ　上原能夫子

ふりつゝく雪のあしたにながむれは
まちかくみゆるなちのたかやま　濱田直子

名にしおふふじのしら山それならん
はるかにみゆるみねのしらゆき　竹村ていこ

わが袖のさむさわすれてながめけり
けさゆきしろきひらのとほやま　小林藤子

けさみれば遠やましろしいつしかも
しぐれのゆきとふりかはりけむ　畠山香代子

よを寒みたきいでてみればましろにも
とほやまのはにゆきぞふりける　長島ひて子

むさし野はまたかれのこる草もあるに
はやちゝぶねはゆきぞみえける　宮原眞代子

きのふまで雲かとみしをけさとへば
ふじのたかねはゆきにぞありける　安原ふく子

やま里のしぐれもはれてをちかたの
やましろたへにゆきぞふりける　橋いさ子

こゝろあてに見れどもけさはわかぬ哉
なちのやま／＼ゆきのつもりて　廣田靜江子

しろたへにやまの色をもかへにけり
なちの高根にゆきはふりつゝ　有田藤子

はるは花とながめわたせし遠やまも
今朝しらゆきとふりかはりけん　屋鋪すなほ子

ひと日／＼とほやましろくゆき見えて
富士もめづらしからずなりにけり　屋鋪かなり子

やまこしのたかねに雪のつみしより
わろかなきかとうたがはれつゝ　日高かず子

何ならぬなちのやま／＼けさみれば
つもれるゆきにけしきをぞ添ふ　香川穎子

雲とのみつれはまとひしとほやまも
まちかく見するゆきのあけぼの　久間森子

朝またきこゝろもてさむしとほやまに
しろくみゆるはゆきにやあるらん　白井さま子

みてもまた／＼もみまくのほしき哉
はる／＼めづるふじのしらゆき　白井さな子

うすずみのあとにもにたり[illegible]より
かすかに見ゆる不二のしらゆき　松岡[illegible]子

ともすれど雲とまがひしとほやまの
たかねさやかにつもるゆきかな　内藤小夜子

高どのゝをすまきあげてとほやまの　内藤千代子

まつのしらゆき見るひさやたれ

ありあけの月かけしらむさほやまの　内藤秋子
たかねましろにつもるゆきかな

小夜しくれはれしあしたに見渡せは　内藤佳子
なちのたかねにゆきそつもれる

まき上る小簾はあられさおもしろく　藤村畿子
ゆきふりつもるなちのしらやま

遙かのくものへたてもしらゆきの　中桐李子
ひかりて見ゆるなちのやま〳〵

筑波ねのみねにつらなるやま〳〵も　萩原章子
かみさひわたるはつみゆきかな

（以下延著撰外）

きのふかもゝみちは見ねしさほ山に　鈴木錠子
今朝はましろくゆきそ降りける

見わたせは峯にも尾にもゆきふりて　石川樂子
はなのさかりさみよしのゝやま

きのふまてもみちに染しさほやまも　石川久子
はやいろかへてゆきそつもれる

さほ山のみねのまつはら見わたせは　石川韻子
たさろくはかりゆきそつもれる

靜かなるさほやままつのすゑはれて　大谷友子
ゆふひにつゝくみねのしらゆき

見渡せはやまへの木の葉ちりはてゝ　小澤ゑん子
なちのたかねにつもるしらゆき

みはたせはさやまの峰はしろたへに　小澤ゑん子
けさめつらしくはつゆきそふる

おもふさちすみ田かわらに船うけて　高井孟子
つくはのやまのゆきをみるかな

けさはまたわきて寒しさみわたせは　服部かつみ子
なちのたかねにかゝるはつゆき

きのふまてもみちよそひしさほ山も
けさはましろにゆきそふりける

夕まくれふもさのささはしくるれさ　小島岩子
さほのたかねはあはゆきそふる

あゐなせるなちの山路も今朝見れは　杉山琴子
みなしろたへにゆきそつもれる

かたらひの山よりなちにゆきしろく　小野田のぶ子
みゆるやかれのみたけなるらむ

立ちまよふあしたの雲のはれまより　徳永萬露子
富士のたかねのゆきをみるかな

十二月五日兼題

友人の非行を誡むる文

越前國敦賀港曙　久間有隣長女

天　久間春子

きこえあげんも、なかなかなれど、思うて言はざるは、何とかや、から人の教も、ありと承れど、みけしきをも、顧みずなん。さては、去年の春、入校せさせられしより、校中、ざえ高く、行末のぞみある、人はと言へど、必ず、御名を、かぞへいで、人々も、ほめたゝへ、參らせしを、我身つねに、あつしくて、入校の志をもえず、只君をのみ、姉君とも、師の君とも、たのもしく、思ひしたひ、まゐらする心には、我身の事よりも、嬉しと思ひ侍りしに、いつの頃よりか、あらぬ御名ども、折々承る事もありしかど、君にして、いかでか、かゝる事おはさん、こは、よるかたもなき、浪のぬれぎぬ、きせ參らするならん、さては、誰人のさかしらならん、もとより、さやけき月は、しばし浮雲の、おほふとすとも、やがて、きよき光こそ、いで來めれと、思ひたのみ侍りしに、此頃、誰、かれの君より、消息おこせ給ひしにも、しかしかなん承りぬる、いといと、心苦しなど、ほのめかし給へど、さては、全く人の、さかしらのみにも、あらざりけんと、俄につむねとゞろき、かつは、口惜うなん、大方、善き事は、人の言の葉に、かゝるも、遲きものなれど、惡き事は、いさゝけきをも、大きくいひはやす世なるに、まして、君には、よき御名、高うおはせしからには、かゝる噂も、早くいよいよ、廣ごり、もしや、御ふた親の、御耳にも、きこえたらんには、いかばかり御心を、苦しめ給はん、君にては、只かりそめの、御戯れにしても、不孝の罪は、空おそろしき、限りなれど、いかで思ひかへし給ひて、學びの窓の燈火も、親しみやすき、よき時候にも侍れど、今の御浮名を、洗ひ清め、給へや、我身もとより、暗き心もて、かくいさめ、きこえあげんは、かへすがへすも、をこがましく、かへりて、みけしきにも、もどり侍らんとは、思ひ侍れど、君を思ふ、せつなる心、おしはからせ給ひて、とくとく、改め給ひてよ。行末長く、さかえ給はん御身の上、一時の思（おも）したがひにて、不孝の名、不品行の名に、沈みはて給はん事、口惜しとは、おぼし給はすや、かく申すにさへ、くやしき涙せきもあへず、いかなるまがつみの、神にみいれられ給ひけんと、

身もをのゝくばかりになん。よろづ、なめげの罪は、常々の御交らひに對し、ゆるさせ給へや。あなかしこ。

地　熊本縣菊池郡加茂川村松本友晫方　松本幾代子

白菊の花もいつしか移ひ行きし此の頃のけしき、いかにかは眺めさせ給ふらん。その後はうちたえはべりて恐こうこそ。此方にも事なうはべれど御心安く思し給ひてよ。さて秋のあはれもいつしかすぎはべりしを、御わたりより吹きくる風の、猶もあらぬ心地せらるゝこそいと悲しくもはべるかな。あはれうち向はせ給へるみ山に立てる姫松を見そなはしても、春の花のうるはしく、秋の紅葉のゆかしきも、雨風にはかなく、獨雪霜にもたはまぬ松の操の、いかばかりたふとくもゆかしきかを思し知らせ給ひてよ。されどこそ世の人にもたふとまれめではやされもするなれ、あはれ妾が言の葉をあわ雪のはかなきごとゝ思し給はずば、いといとうれしうこそ。あなかしこ。

人　千葉縣安房郡豊田村　三幣みさを子

春の櫻、秋の紅葉のをり〳〵に、訪ひつ訪はれつして、睦ひかはせる身にし侍れど、久しうおとづれ給はぬは、いかなる故にかと、怪しう思ひわたりしに、この頃、人のうはさに、御許には、近きわたりの學生たちと、打ち交りて、日々語りのゝしり、裁ち縫ひの業さへうち捨て給ふ、ときくはまことか、もとより、口さかなき者の言なれど、常々さとき御性質に、かゝる行ひありとは、うけがたけれど、火なき處に烟たゝず、とのたとへも侍れど、互にへだてぬ友の情として、何事もえいはで打ち過ぎむも、腹ふくるゝわざにし侍れど、一言きこえあぐるになむ。日ころ、手をも放たず、愛讀し給ふ女鑑にも、女子の誡めにとて、侍る如く、古より御國は男をみなのへだて、殊にきびしく、男女七歳にいたれど、席を同じうせず、とこそ敎へつれ、かくきびしう敎へてだに、男女の間には、過ち多かるを、明治の大御代となりては、博く外國と交を結ふに至りしより、心得違ひたる輩は、ひたふるに西洋をのみたふとがり、御國の女子にはふさはしからぬ、男女同權とか、女權

擴張とかいふ、いとこちたきわざまでいで來て、わかき男女の互に打ち語らふを、恥かしともせざるやうなりにたるは、いと／＼うれたき極みにこそ。されど、このことわりを、よく／＼わきまへ、四方に立ち迷ふいふせき浮雲を、とく／＼打ち拂はせ給ひて、いと清き月の光をもらし給はむことを、心にかけて念じ侍るになむ。あなかしこ。

（以下原稿到着順）

高橋きん子

小車のめぐる月日、小川の流れの早くもくれて、今年も此月限りとはなりぬ、久々打ちたゆ心ならず、うと／＼しく伺の書をもまゐらせざる折から、いよ／＼御機嫌よく渡らせらるべく、めでたく祝び侍るになん、偖は此頃承れば御許には、御兩親さまの御諭を守らで、賢きみこゝろにも似げなく、常ならぬふるまひあらせらるゝよし、或人のつぐる話を聞き、いかなる事より起りしかといとうち驚くばかりに侍り、御兩親さまの御諭は皆のち／＼あなたの身のためになるものゆゑ、今より厚き御教のまに／＼愼み守りて、後の悔なきやうに、わろきを改めよきを行はせらるゝやうあらまほしくこそ、拙きおのれ憚をかへりみず諫めまつりがたきことなれども、惡しきを責むるは親しき友の道とかや、又古人のいひけるは、藥は口に苦くして病のためとなり、ま言は耳にさからひて行のためとなるとあれば、此の心を悟らせられ、數ならぬおのれの言を御きゝいれあらば、こよなきよろこびになん。あなかしこ。

長谷川はる子

紅葉は霜を得て二月の花よりも美に、梅は雪に堪へて芳しき香を放つに非ずや。抑幸福は多く艱難辛苦の後に生ずる者にして、决して偶然若くは僥倖によりて享くべき者にはあらじ。されば人たるもの、常に身を艱難辛苦の船に投じ、安心なる航海をなし、幸福なる彼岸に達するこそよけれ、然るに多くは目前の安逸を貪り、前途多望なる旅行たるを忘れ、身を放蕩懶惰の中に置き、或は無益の業に大なる光陰を空費し、遂に陷りて浮ぶ瀬のなき不幸の濁に沈むに至るは、自業自得とはいへ、如何にも歎かはしく痛ましきことの至りならずや。こは只其一人にのみ止まらで、一家親族にまでも汚名を蒙らしむるに至るなり、誠に忌むべく惡ふべきことといふべし、平生勤勉にして物事に敏き我友の、かゝる淺墓なる理を知り給はぬ筈のなければ、かゝることといはんはいとをこがましきわざにはあれど、此ほど快からぬ噂の聞ゆるは、また／＼御身の才識を嫉む腹きたなき徒の、根もなきことを惡しざまにいひふらすならんとは思ひしかど、餘りに喧しくて、其を聞くごとに我身を謗らるゝよりも苦しさのいやまされば、無禮をもかへりみず、いけんがましきことをなすことゝはなりぬ。過ちて改むるに憚ることなきは則君子の行なりとかや。されば若し我が赤心を憐み納れ給ひて、再び舊日の御身となり、益々勉めはげまれなば、馥郁たる梅が香のにほひを放ち、麗しき紅葉の衣を著して故郷に歸らるゝ日、期して待つべきなり、嗚呼娛し

きかな、其日父母の君にはいかに喜ばれん、我身はいかに嬉しからん。あなかしこ。

河田いし子

學の友の數ある中にも、御前樣と妾とは、いとけなき時よりはらからもたゞならぬ中、學の庭への行き歸り、日曜日の遊びにも、手をたづさへ、日毎〳〵にしたしみ深く、何ひとつ心置く事もなきなかなりしに、此頃は、何となううと〳〵しうなりゆきし事の、こゝろぐるしう思ひ侍りしに、きくともなしにきけば人傳に、近き頃はよからぬ友とまじはり給ひ、御身のおこなひも、今迄と違ひ、其ふるまひ、言の葉も、いと荒々しう、夜そゞろあるきなどにも、その友とつれだち、はしたなうふるまひ給ふよし、きゝつる妾のおどろきひとかたならじ、ひとつにはうたがひひとつにはかなしみ、何事にもひいで給ふ才ある御身、ものゝ心得の深くおはしましゝに、いかなるまがごとにまどはれ給ひしかと思ひ侍れば、くちをしうかなしくてなん、我身のあしき事は我身にしれぬものなれば、たゞ一時の御心得違ひとはおしはかれど、人にさけすまれ給ふ事のくちをしくて、御心に染まぬかはしられど、へだてなき友の眞心ときゝ分け給ひ、御兩親樣其外人々の心つかぬうち、あやまちをあらためたまへかし、かく申すも友がきのへだてぬ心よりと、惡しくなきゝ給ひそ、濟き心によく〳〵くみ分け給ひて、人のうやまふうるはしくやさしき本の御心にかへらせ給はゞ、妾も申上しかひありて、嬉しくよろこばしく、本の心になり給へかしと、繰返してもかくなん。あなかしこ。

及川千ひろ子

血をわけし同胞にもまして、親しうむつひかはせし御身か、あらぬわざにあたらしき御名を下し給はんこと、見きく妾の心苦しさ、何にかはたとへ侍らん。人知れずしぼりもあへぬ袂の色、一目なりとも御覧せさせまほしくなん。そも一たび嫁きては、二人の夫にまみゐぬば、女の第一に守るべき道に侍る。さばかりのことわり知らぬ御身にも侍らずながら、いかなる御心の迷にかあらん、父母の定め給ひし夫をふり捨てゝ、此にも賤しき俳優とかいへる、うきたるものとなまけなかはし給ひしことよ。いとかしこくも父君母上の御名を下し給ふのみか、敬なられと友誼の内に數へさせらるゝ妾までも、人に對ひて面赤む心地なんし侍る。かゝるあさましき御心のつき初め給ひしは、よも現心にはましまさず、昔物語に見きゝ侍しりものゝけのしわざにもやあらん。かへす〳〵口惜しき御事にも侍るかな。彼の俳優などいへるは、もとよりまめ心などいへるまめ〳〵しきすぢは、かけても思ひより侍らず。只色にふけりて浮きたる世を過こすやからになん侍る。人は一たび浮名の世に立ち初め侍りては、再びすゝぐことかたきわざにあなるを、まして所狹き女の身には一しほになん。溯りての行末は、「なき名ぞとだに」かこちもの給はぬなん、いといとほしうこそ、末の松山波立ちさわがぬ間に、かしこき御心に思ひかへさせ給へや。へだてなき心にまかせて、思ふ心の底うらなくきこへまつるこつなき言の葉、なめしとさとめ給はで、ことの心くみ給ひてよ。あなかしこ。

浦井豊子

さいつ頃三たり四たりの友の、君の身にあるまじき御振舞なし給ふよし告げゝれど、日頃物固き君にかぎり、いかでかみだりなる御行ひのあるべきと、一ことの許に云ひこらしぬ、さるに、其のち、他の人より、又も聞苦しき君の身の噂を耳にし、殊に包みあへぬしかとしたるしるしもあきらかに聞き得しかば、妾の驚きと悲しさとは何にたとへん、そも、君は學びやにても、萬のわざ人に勝れ給ひ、且つ御心ばへやさしく正しかりければ、師の君の御覺えもいと目出たく、妾も又なき友と慕ひて、末たのもしく、何事も姉妹の如くたのみ聞えつるを、かくも淺ましき御心とはならせ給ひし事の、果敢なしとも口惜しとも云ひ知らず、今更君のため云ひとき置きし友に合はす顔もあらずなん。殊に御父上君は、やむことなき御位に居給ふに若し御名にかゝる樣の事ありては、御二方樣への御不孝も淺からずと思ひ侍り、あはれ。君よいかで妾の切なる深き心を汲み給ひて、一時も早くもとの淸きうるはしき御心にかへり給ひてよ。涙ながらに祈りまつるになん。あなかしこ。

弘田ゆき子

數ふれば早三年過ぎにし春まで、一ッ園生に結び込められし學びの庭の花の友垣こそ、雨の夜半、風の朝にも、思ひ出で給へらぬ日もなけれ。扨も西と東に別れ侍りてより、君にも猶奥深う究め給へなむとて、都の空に出立ちまししかば、さぞな螢の光りに昔を尋ね、ふりつむ雪に行末をはかりて、勉めいそしみ給ふらむと、遙におしはかり參らするにつけ、ゆくりなく打驚かれぬるは、此の頃のうはさなりけり、難波津のよしあし繁きは、人の言の葉の常、もとより御心の程幾重にも思ひ聞え侍れば、空吹く風とは聞き流せど、世の人のいかに思へらむが悲しければぞかし。よしや、上野の花、隅田の月、心ひかるゝふしありとも、旅衣故鄕をたち給ひし折の。父君の御仰せ、母刀自の御言を繰かへしたばし出給ひてよ、物のあやめもわきかぬる身の、かにかくに聞え上るむらいの罪は、さり所なく侍れど、年頃よのつねならずむつび參らせしゆかりもて、かくなむ。あしくなおぼしとがめ給ひそ。あなかしこ。

麗はしく匂ふ大和のをみなへし
なき名取川に影うつさめや

山下てい子

野べの千草に花咲き亂れて吹く風かをり、置く霜匂ふいともたのしき秋の日は、こゝかしことあくがるゝ間に、いつしかゆめと打ちすごし、ことしもはやのこりすくなうなりはべりぬるを、はつかしき姉君には、此ごろいかにあかしくらしたまふらん、なきわたりつる雁にもおとづれせさせたまはねば、いと心もとなうて、日ごとに御噂のみなし暮しぬ、折からほのかに承れば、姉君にはこのごろふみの道はいふも更にて、日毎の家事の手たすけ、あるは裁ちぬひうみつむぎなど、女の主として取り行ふべきわざをば、一向にいそしみ給はで、あらぬ道のあそびなどに月日をすごしたまふとか、こは大かたつたふるものゝさかしらならん、とは思ひやりはべれども、さりとは又人にうらみをうけたまふべきいはれもたせたまはぬ姉君に、さるさかしらかまへん人もあるまじなど、獨り心もかきみだされてなん。もとより御心あきらかに德高うまします君の、さるひが事に

ふけらせたまはんやうははべられど、もし一時の御心のまよひか、はたよしなき友の導きにてか、さるかたに似たる御行ひどもおはしては、今まで世にもてはやされたまひし性まれも、みな水の泡と成りぬべく、又ひとりおはする御母君の御心痛の程ども、いといと心苦しうあまつさへこれまでともに御敎うけし師の君に、いかなるおもてもてまみねたまふべき、朝夕親しく交はり參らせつる姿容まで、いともおもなきわざにこそ。さる御心にては、いかで御父君の御靈なぐさめたまふごときことの叶ふべき。あはれ妾が切なる心くみとりたまひて、今よりは御心ただしうもたせたまひ。はや〳〵元の姉君とならせたまひてよ。さても隔てなき間柄とて、かゝるなめげのかず〳〵聞ねあげ、いかばかり御心そこなはんかと、聞の程どさへ恐ろしうはべれど、日ごろの妾がたちとて、かゝること聞きすてがたうはべれば、かくは筆に走らせはべりしな、あしうな思ひたまひそと、くりかへし〳〵願ひまゐらせつゝ聞ねあぐるになん。かしこ。

永井まり子

御身には、さいつ頃より、學びの庭にかよはせ玉ふことのたえたれば、妾はさらなり友ごち一同、日頃より人なみすぐれていそしみ勵み給ひし君の、見ねたまはねは、いたつきにてやなど、ひそかに心なやため居りし折から、ある人の、かたるをきけば、君にはいぬる夜さる人にそゝのかされて芝居見物に行かれしに、其時の面白さの忘れがたくて、それより後は何事も打すてゝ、只日夜芝居見にのみ物せらるゝよしをきゝし妾の驚き、いかはかりぞや、なべて芝居といふものは、なりに之を見れば、或は目をよろこばせ、またうさを晴らすによろしけれども、ふけりては學の道のおろそかになるのみならず、かゝる人の多くあつまれる所に日々居りては、大に身體の健康をそこなひ、又あたりのよからざる爲めに、しらず〳〵のうちに嬌態をかきて、終には一身をあやまるもの、世にそのためしとぼしからず、御身の御聰明百も御承知とはおもひ侍べれど、一時のあやまちてふものは、君子もまぬかれざる事に侍れば、何卒いまよりは御心をひるがへし玉ひて、あたら用なき遊びに時をつひやさず、此とふとき光陰を惜しみて、一すぢに學びの道をいそしみ玉ひて、あはれ世に名かゞやかし玉はんことをのみ、ひたすらにねぎまつるになん。

大寺浜迷子

開けゆく御代の惠みに報ひ奉るは、如何で男子のみならん、女子の務も亦いやましにおもくぞある、されば、君の爲め家のためには、其本分をつくすこそまたきはざならめ。さても君には、いはけなかりしよりいとさかしうまし〳〵、其の后は學びの道も愈々奥深くわけ入らせ玉ひて、萬に長けさせられたる御事、親しみ深き吾身までいと〳〵嬉しうなん、さるをいかなれば近き頃は折〳〵男子をもしのぐ御擧動雄々しう侍るのみならず、御母君をさへ蔑にもてなし玉ふなど、あるまじき事のきはみかなとこよなう嘆かはしうはた口惜し、さるあさましき君にはおはさゞりしを、いつ如何なるあしき友をか玉ひて、かくは成らせられけむ、君が常々口ずさみ玉ふ女丈夫は、必しもあしきとには侍られど、女子の本分をよそにして、學問を誇り、驕慢なる行ひあるは、敷島の大和島根の女子の所爲とも

發はず、抑々女子の身にては、只温良和順にあれと存じ侍る、さるは自ら愛國の志にもかなひなむ、歌に、すなほなる心の元みれさすれは香燦の花も眞にそ咲く、とかや申侍る、たゞ〳〵心正しければ、おもてもやはらぎて、實に玉を包める錦の如くならんかし、只管それのみ案じわづらひ、はては耐んがたさに、拙なき筆の愈々なめげなるさへ打添へて、をこがましうも聞ね參らするになむ、身は數ならぬ根無し草の、さるべきふしも侍られど、友愛の誠にいでし露ばかりの心、あだなる風にな吹き拂はせたまひそ。かしこ。

名取正代子

此程風の便りにきけは、御身は近頃學の業もやう〳〵怠らせられ、學の庭には通ひ給はで、あたしこみちにまよひ入り給ひ、あまつさへ女の道にたがひたる御ふるまひせさせ給ふとかや、果してさる事のまことならば、いかにまよはせ給ひつる事のいみじきや、一文字をだにしらぬ者も、心あるものは、さるひが事はせざらむ、まして御身は、長き年月學の庭にいそしみ給ひて、物事の理さへふかうわきまへ給ひながら、いかなればさるうしろめたきわざせさせ給ふぞ、御名をば汚し給ふぞ、御名をけがし給へば、たゞに御身一人にはとゞまらで、我々同じ窓にあるものども、みなのまことをさへ失ひ、且は我校のめいもくにもかゝり侍らん、いかで〳〵深うかへりみ給ひ、一日も早う改め給ひてけがれたる名をあらはせ給へや、をこがましけれど、日頃親しきまじらひの中なれば、よの人のかたらひのゝしるが口をしう、かなしさもだしがたうてなん。いかで〳〵。かしこ。

宇多田やう子

聞く、君は近頃男女同權など唱へ、耶蘇教信徒と相交り、ある時は男女打まじり、肉店に醉を買ひ、傲然相話し、相戯笑するなどまことに女子としてみぐるしき振舞ありと、けに君は妾と殊更交りふかく、花の旦、月の夕、相遇ふ毎に、良妻賢女、且は孝女烈婦の傳などものがたり、互に我が日の本固有の女風に習はん事を心がけし身にして、俄に心ひるがへり、かくあさましき事のあるとも思はさりしが、噂たつ事の更にも捨てがたければ、たゞちに君が家を尋ねぬ、折から君が居たまはずして、母君にこそ訪ひ侍りぬ、母君たゞならさる体にて、君の非行をつぶさに語り、いと御心を痛めさせられぬ、こゝに始めて事の虚ならさりしを知り、聞く毎ごとに胸つぶれ、心も裂くるばかりなき、君いかにしてかゝるひが事に心うつりぬるか、如何なる惡魔にみちびかれぬるか、かゝる事は、我が風俗を汚す蕩婦とや云はん國賊とや謂はん、聞くだに忌はしきと常に謂ひとなへつる君にして、如何んぞや、けに心得がたくなん、心はたゞに御親の御心を痛めさせらるゝのみならず、妾が心も、またあはれみ玉ひてよ、まことに杖とも柱とも賴みし君が、かゝる行ひありては妾いかにして日を送るべきか、よく深くかんがみ玉ひて早く〳〵と本の御心にかへされ、朝な夕な、互に我が日の本の女性特質の美徳を講し、世の鑑ともならん心を起さしめ玉はん事を、せちに願ひ參るになんかしこ。

降田滿起子

古郷におはす御父母の君には、寒さのさはりもあらせ玉はで、御健

にか通させおはしますものから、子を思ふ親の心とて、日毎夜毎に君の事をのみ言くらし安じおかさせ玉ひて、一日も早う學の業を卒へ、錦をかざりて歸りまさん日をのみ、まち樂しみ給へる御有様、よその見る目も涙ぐましう、いとゞ身にしみ侍りてなん、さるを、ほのかに承り侍るに、君には近頃學の道怠りがちにて、よろづあだし人に立後れ玉ひ、師の君達の聞にもあしうおはしますとかや、二葉より人にすぐれ給へる君の、などてさることの侍るべき、そは何かのあやまりごとならんとは、かたく信じ侍れど、もし萬が一つにも、さる御けはひのつゆもおはしまさんには、御身一生を誤り給ふのみかは、さばかり御情深きたらちねの君へ、御不孝の罪もおそろしうや侍らん、かれこれ御考への上、とく／＼あらため玉ひてよ、頃しも燈火親しむべき好時節、あたら光陰を費し玉ふことのあるべきなど、打つけに聞え上ぐるも、隔てなき親しき間柄、無禮の罪はいと深かれど、ひろき御心もてゆるい給ひれかし。あなかしこ。

黒瀬すゑ子

去年の春都に立ち上り給ひてより、かたみにへだてなく語り合ふふしもさたね、かりかれのゆきゝにつけて、いと／＼御なつかしうてなむ、さて此程君が御みもちにつき、とやかくさゝやきあふものこれあり、さばかりの御わきまへ給はぬ君にもなきものをと、いたく驚き侍りぬ、しかはあれど、種もなく根らなき空言を、さすがに幾重の雲をこえて、語り傳へん理もなきことゝ、心は千々にかきみだれ侍り、萬一語り傳へのまことにしあらば、御身の上はいふに及ばず、故郷なる御ふたかたの御心の中、いかばかりかと、數ならぬ身にも思ひ知られてなん、かゝるいさめだては、實に其道を說くに似たれど、君が日頃の御心に、妾がまごころをくみわけ給ひて、とくあらためさせ給ひなば、こよなきよろこびにこそ。かしこ。

田中ひろ子

ほのかに承れば、御許様には、近頃いたく學びの業をおこたり給ひて、よからぬことに心ざし、其が爲め衣服頭飾具などいみじうきらびやかにかざりなし給ふとか、人々云ひ立ちさわがしう聞ゆれど、さすがに君の御性質なれば、かゝる非行はよもあるまじきことゝ、さしも信ぜざりしに日數ふるにつれ、いよ／＼よしなき噂ごとかしましう聞ゆるに、始めて打ちおどろき、且つあやしうなん、若しかゝる業しも眞なりしならば、早う父母君に聞えぬ先に、み心を改め、前にもまして御勉學遊ばされ、來ん春には目出たく御卒業の上にしきをかざりて御歸郷の程、切にねがひてやまざるになん。あなかしこ。

岸田はつ子

年月はながるゝ如く、學のわざを終へ給ひて、はや一年あまりにもなり侍れど、香細しきみ名はいや高く、此程も修身科のなり、師の君の君こそ女の鑑よと、いたくほめはやし給ひしより、日日御上のみ噂し侍るに、御うらやましさは八しほにて、いかで御かたはしをたにまねばやと、思ひ侍るものを、此頃承り侍れば、君には、近ごろ遊戯にいたくみこゝろを注がせられ、日毎に時ならぬ御そとでなし玉ふめるを、とかういひはやすよし、それやがて御ざれなれためるもののしひごとゝ、心にもかけでありしが、たび／＼きゝ侍れ

ば、返す〳〵もまことは思ひ侍られど、萬が中の一つだに、さあらば、ゆゝしき御大事にこそ、さては、今までの御名は忽ちきえ、れためるものはます〳〵あしざまに申すべく、もし紙上にあらはるるやうのこと侍りなば、君の御名なれば更にて、御親御樣のいみじき御なげきにもなり、かつは學校のはぢとこもなり侍るべし、さりながら、なほ世の噂のいつはりにて、きこえしことのひがごとなりせば、わらはがおもぶせ中々にうれしうなん、とにもかくにも、おん前さまの世のかたり草となり給ひなんことの口をしさに、へだてぬ心のまゝを申すなれば、なめげなるは、あはれさるかたにゆるせ給ひてよ。かしこ。

續木龜子

山姫の心を盡して染め出にけむ千しほ八しほの紅葉の綿、朝日夕日に照り輝きて、まばゆきまでに、いとも美しと愛ではやされしも、一夜木枯し吹きすさめば哀れ空しき木々の梢、見る影もなき野山のけしき、いかに眺めわびさせ給ふらんなど、事に付けつゝ思ひやらるゝは、心隔てぬ友の中垣に、此程は唯落葉のみ散り積りて、往來とだえし柴の戸を、音信るゝはかなき風のたよりにはあれど、君の御身にかゝる憂き吳竹の一ふし、谷川の瀨の音と共た、たゞ等閑に聞流すべき事にもあらぬを、さりとて常々御心ばへのをゝしくいさぎよきをこそ思ひたのみて、二なき友とも姉妹ともむつみ交しし御許樣の、いかでかゝさる淺間しき御心にやは成らせ給ふべき、過つる秋のべの八千草ふみ分て、萩が枝を手折つゝ見渡せは、穗に出てゝ誰としもなく招く尾花に、我かとなびく女郎花の、さまをかしくなまめかし、心して見る人毎にうち招く、あだし男花の露に、袖をなぬらしぞなど、興じ笑ひ給ひし事をさへ思ひ出でゝは、浮草の根もなき事にてぞあるらんとは、かたく推し侍れど。中々にあらぬうたがひをだもよにもとめては、猶更くちをしく、はた御身一人の汚れのみにはおはせぬをなど さま〳〵に思ひまど ひては、今更よそ〳〵しくのみへだて給ふ此頃の御振舞も恨めしく、又奥深く籠りてのみおはす由、ほのかに承はるさへ胸痛くぞ侍る、人の心は花染のうつろひ安き色になづまで、操も高き吳竹や、いつも常磐の松か枝に露のぬれ衣干し給ひて、世に愛で貴はるゝやう必らずあだし道にふみ迷へりと人のそしりをまねき給はぬやうとのみかへす〳〵も、ねんしはへる、よろず對面の上にてとは思へど、病勝の身は心に任せず、まはらぬ筆にかにかくとふろし上るも、君を思ふまごゝろの餘りぞと、御恨み怒りなく、露哀れとも思し召さば、人目も草も枯れ果て淋しく殘る松風のみ絶えぬ山里の賤が門を、一度訪ひ來給はん事を、只管侍ち入りたてまつるにこそ。かしこ。

岡澤りん子

春のころは、かたみに行きかひし姉君の、夏の初めより、いとうと〳〵しくなりまさりぬるに、かくては高等小學にありしときより、人よりはわきて睦しく、友人にもよきつなぎ玉とたゝへられしかひもあらざめりと、度々訪ひはべりしに、いつも宿にいまさざれは、はかなく立歸りぬる事の重なるに、渡り玉ふ方尋れ侍りしに、母君は學校にありしころは讀み書き裁ち縫ひの事にのみ心用ひしものが、此頃はあらぬ方に心を入れ、風琴月琴なとの調べのみなしぬる

こそ、行末如何なるらめと、心憂く思ひ煩ひ給ふよし、いと打萎れて仰せられぬ、そも物の音の調べは、女の物すべき事なんめれど、さりとて之れにのみふけり給ひなば、後に悔い玉ふ事もありなん、母君の御心もあはれとおぼし、裁ち縫ひよみかきの事に御心を用ひさせ給はんことこそ願はまほしけれ。日ごろ親しきにまかせ、なめげにさかしらだち、諫めことし侍ること、許るし聞こしめし給はゞ、いかばかりうれしからまし。かしこ。

泉　さい子

其折からは御前近くま見ねはべらず、打たへうとかりし頭は赦し給ひれかし、此比風の便りにもれ聞きはべれば、御前様には日比いそしみたまへる學びの道もいつとなくうと〳〵しく成行せたまうよし、いかなることのありてかは、ちゑ淺き身のおしはかるべくもあらねど、國にまします御母君は、月の夕の哀るも花のあしたのながしきも、御心たらぬ思ひをなし給ひ、神に佛につかへまつりて、御前様の卒業の日を、指折かぞへ御待ちはべるとかや、もれ聞く妾が袂にも、時雨催しはべるぞかし。かくも深き母君の御厚恩をおろかにしよそに見なしたまはで、只一筋に學ひたまひてよ、身のおろかしさも顧みず、まめだちたるねせ者よと、御怒もあらんなれど、けふは師の敎を受け明日は人の母となる御身にしあれば、かた時もやはか見すごすことかなふべき、いと日比へだてなき御なからひなれば、心のかぎり申上候、あはれ妾が赤心を察してかしこき玉鉾のすぐなる道にかへらせたまへかし。あなかしこ。

一すぢに文の林のおくとひて
よしなき路にふみな違ひそ

小林　ふぢ子

今年もはや大かたはすぎ去り侍りぬ、君にはいかゞおはする、妾はいたづらに月日を送り、いまさらにかへらぬ事をくやめど、かひなくわづかに身の恥なるさり侍りしにひきかへ、君には學の庭にいそしみ給ひ師の君が敎へくまなきに、女の鑑をみがき、やがて來ん春は、桂を折りたまふべしと、よろこばしう、君が高く清き名をあらはし給ふを、こよなき樂しみとこそ思ひ侍れ。さるを君が御行をそしる人のいできしに、口惜しさやる方なく、力もぬけはてゝなん、かまへてさる事はおはせじ、こはあだし人のねたみ心よと思ひかへせしものから、守るべきを守り、行ひ正しかりし君を、たがうたがひそめけんと、いとあやしうて、かへりてはそのぬれ衣いつほすべくもはかられず、はた父母の御名をけがし、こよなき御不孝とやなりぬべき、あはれ淸らなる君は、おもへば人ほどおそろしきは侍らじ、ちりばかりをも、大きくいひひろめぬるものあれば、ゆめすきまなありそ、今よりは、いよゝつとめはげみたまひ、朝な夕なに女の鑑をひもときて、古のかしこき人を友とし、露だにかゝるそしりをうけたまはぬやう、心し給へや、さらば、君が身にふりかゝりたるいまはしき名も、あは雪のあとなく消ねて、うるはしき春の花にかぐはしきいさををもたて得べし、いとをこがましう書きつられたれば、身をかへりみぬ、しれものとおぼすべけれど、いかでゆるさせ給ひてよ。あなかしこ。

おほけなく書く言の葉に君をおもふ
こゝろの底を汲みて知れかし

佐々有隣子

李下に冠をたださず、瓜田にくつをさらずと故人の金言うべなりけり、中かきのへだてなき友にしませば、識者めぎて、一言を學窓のもとにまゐらす、いかにとなれば、此ころは、昇校も欠席がちになりたまひ、教師の御さとしも、耳しひたまひけん、心のみか、姿もあらぬさまになりたまひて、修身の意は露ほども坐しまさず、終身までの長き月日を何をなしてくらしたまふらん、今より身をかへりみたまひて、もみぢ葉のあかき心に立かへり、世にめではやさるる人と、再度なりたまひてよ。あなかしこ。

尾鋪　すなほ子

はるの花秋の月をも賞ではやすいとなしと、螢の光窓の雪を友として、ひだすら學びの業をいそしみ玉へるおん身、わきて質聰く渡らせ玉ひ。試驗の度毎、師の君をはじめ、やんごとなきあたりよりも、或るは賞め言葉の狀、或るはその印の品なれど、かず〱賜かれ、實に學びの道たどる女子の鑑ぞと、世の親たちにうらやまれ、いくその人にたゝへられつるものを、先いつ日、錦地日醒新報に、おん身の醜き評め見ゐたりけりと、小學校へ通ひしをり、鍋のあともいひあへし、露子刀自の語らひしをきゝて、頓のことに胸つぶれ、人目もはばからず、涙の露をおし拭ひしぞわりなきや、もしかりそめにもまことの評めなりとせば、おんみのみめかたち、學びの力も何のやうなく、玉の盃の底なきがごと、口をしう言ひ甲斐なき限りになん。されば、口さがなきもののあはれわざとは思ひなほし侍れど、諺にも、火の氣のなき方より烟はたゝじとあれはと思ふも、我が淺き心からなりや、さてもおん父君、おん母上にしれなはそのおん怒り、そのおん嘆き、いかにしてかは言ひときまつらんと、心うくわつらひはへるあまり、はゞからずかくなん聞え上げ侍る、もし人ちがひにてもあらは、妾が老婆心と思し召されさる方にゆるしたまひてよ、夢にてもあれかし、夢ならばさめてうれしからましを、さかくありのまゝ委しくかへりごとして、妾のうさはらし一よ、かくすこととなきぞ親しき中の誠なる。かしこ。

白井さま子

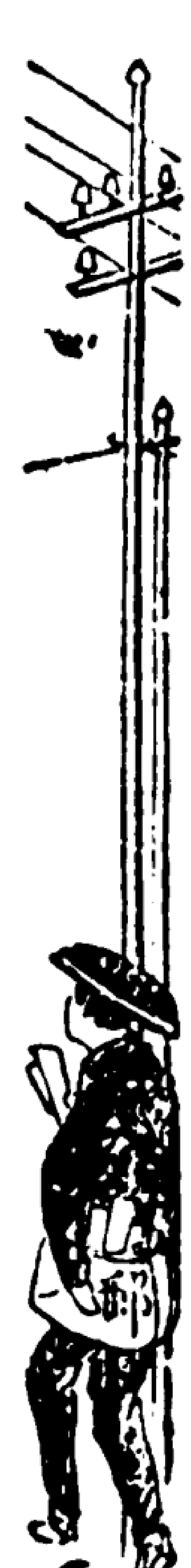
嫁き給ひしより、みけしきいかならんと明暮心つかひせしも、はや二年にもなり侍り、この頃、風のたよりに、母君との境に、聊波風の音の聞ゆめり、一時は夢の心地し侍り、げに家風とか、習慣とかいふけじめを、皆異る世なれぬ人のもてなして、時代のことなる君に事へ給ふは、のどかならざる時もやなど、おぼつかなうこそ、されど、母君も、猶時代のちかひし舅姑に事へ、子女を育て給ひて、やう〱今に至り、聊か心のまゝなのたはず御けしきの面白からぬを、よしなに面白う、昔舜のよしなの父に能く事へ、己が大位を捨て、父を負ひ海濱にのがれんまでなし給へば、終にその父の心を化し給ひしとなん、されば、天下の父子の間は、すでに定まれりとは、古人ものたまひしところにこそ、されば、誠を推して、母君に事へ給はんには、母君ものち〱は、御心にかけ給はんことや侍るべき、やがてのどけき春に至らんは、いかに樂しきことに侍らずや、桃の天々たる、その家人によろしとは、げにゆかしからす、まる覺ゐなき身の、かゝること申し侍るは、いかゞはしきことに侍れど、元よりへだてなき間柄とて、何のはばかりもなう、かくなん。あなかしこ。

松岡濱子

すぐる日同窓のなにがしより、〆の便おこせたるなり、ほのかに、君がありしにもにずならせたまひしよしもらしたりしを、君ばかりは、いかでさることのあるべきと、うちすごしたりしに、こ度松山のぬし、久々にてもどらせたまひぬるものから、變りたる都の樣はうちもきかで、かはらぬ君が親しきみありさま、いかにと、先づきゝはべるに、誠や君にはいにし頃より、學やに來ますこといとまれ〳〵にて、花のあした、月の夕べに、うれしからぬ友垣のむれに交はらせたまひ、あくがれたまふとかや、さるにては、君がこゝなたゝせたまふ時の御言の葉にたがふのみかは、君が學のわざ綜へさせたまふをのみ、樂しみもまたせもしたまふ父母の君が、御心つくし、いかにぞや、さく〳〵本にかへらせたまひて、裘ならぬ心のうらに、あやにしきさりがされたまひ、一日も早う故里に向はせたまはむ事をいのりまつる、かへす〳〵も、さくあらためさせたまひ、つぎにはうれしき御便りを聞かせ玉へや。あなかしこ。

中田豊子

さいつ日より逢ひたう思ひ侍りつゝ、暇なき身の其餘なかりしが、さはれ御身に、かく云はんもほいなう覺ゆるものから、妾が親しの君にしあれば、いかでいはずやはあるべき、ゆめな怒らせ給ひぞ。夜べ御尊母の君のおこし給ひて、此度びの事をこまこまと語らせ給ひけるほどに、妾も袖打絞りて、よきに計らせ給ふ御心に背かせ給ふこそ、とたゞ〳〵出ん言の葉もなかりしまゝに、かゝるいらへもし侍りしは、なか〳〵に心苦しき限りにこそ。あはれ御身よ、子を思ふ親の心を思ふ子の、などて御父母の君の御意にしたがひ給はざるかくては、海よりもいや深く山よりもいや高き、御恩を忘れ給ひにや、しかあるべう覺ねす侍る、さなれは、はやう御心を改め給ひて、御父母の君の御心をやすめさせ給ひね、今更のごとまをすへきにあられど、あなたの君は、御德いみじうすぐれさせ給ふのみかは、氏の業にもいとゞ長けさせ給ひつるを、見て感じまつらぬものやある、さらに御身には、少しばかりの事を、審さし給ひて、我心ならずなど云ひ給ふとは、あたら御身の言の葉なるかも、めぐみ深くなさけ厚き御父はゝの君が、御身に計り給ふことゞも、いかで〳〵わろかるべき、よく〳〵御婚儀の吉日を定め給ふこそ、此上なき御孝行の道なれ。そも御身が此度の事は、いみじう御心違ひさせ給ひしものゆゑ、今こゝに强くも顧みさせ給はずは、御身の御名も冬の夜の月、いづれはかくる悲しさに沈ませ給ふこそ、明らけき事ぞかし、されは、世には、あやまちて改むるを君子と云ふ　さては、過を改むるに憚ること勿れ。なんどの事あるは更にもいはず、世の道を能くも明し給ひつる御身にしあれば、必らずや、御心に悟らせ給ふところのありて、御父はゝのみ心にかなひさせ給ひつゝ、さては數ならぬ妾が心をも喜はし下さる事の、近きにあるらんかし。否な、しかあるべき事にこそ、何れ二三日の中に、御顔を拜みまつりて、ゆるりと御話いたすになん。あなかしこ。



述懐　竹内正女
恨みしなうらみたりとていかにせん　世はとこそはにかゝるものにて

庭薄　金森俊子
月もいてひともとひきしこのゆふべ　たれをまれくかにはのほすゝき

虫　仝
夕まくれ小田のあせみちすきゆけは　こゑあはれにもこほろぎの鳴

月前笛　小萩園露子
たかこひよ月にうかれてしらふらん　くもゐに澄めるふゑたけのこゑ

暮秋懐旧　菊川香子
ふりし世を忍ふなみたのしらつゆも　ともとなりゆくあきのくれかな

寒松延年　永田たれ子
ゆき霜もさそふあらしもよそに見て　いくよさきはのなかのへのまつ

海邊千鳥　仝
ゆふされは志ほかせ寒みつきかけの　きよ見かさきにちとりなくなり

神嘗祭　佐々さし子
八束穂のたりほのいれをさゝけつゝ　いのるこゝろをかみやうくらん

田家月　仝
秋田もりかりほのいほのとまもすたれ　かゝけてつきのかけを見るかな

古寺月　仝
古てらののりのともしひかけきゑて　あか井のみつにつきそやとれる

田代艶子綾子の姉妹が父の正七位君と共に熊本市より八代郡に轉住を送る　佐々有鄰子
やつしろのいけのかゞみに寫眞鏡を　ともと見んとはおもはざりしを

仝
眞金路をはしるくるまにきみを戀ふ　こゝろをのせてやるよしもかな

松間月　海東子
世をしのふよもきか宿としりぬらん　まつの葉こしにつきもとふなり

仝
うきくものたゝよふ夜はゝ月かけも　まつのこすゑにれふりかほなる

仝
さひしさはわれはかりかは松か枝に　ひとりすむなりあきの夜のつき

冬月　谷口ふさ子
ここの浦なみのしらへのおとたえて　みきはにこほるふゆの夜のつき

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊		十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)		五十五錢	
十二冊前金(半年分)		壹圓	
全國無遞送料			

明治三十年十二月四日印刷
同年十二月五日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木艮雄

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 (電話番號本局八八) 國光社

金製指環

●川端玉章先生考案並書

●加納夏雄先生考案並書



●十八金目方三匁付片切彫刻價十八圓ヨリ二十五圓マデ
●十八金目方三匁付平象嵌入價二十三圓ヨリ二十九圓マデ
●二十二金目方三匁五分付片切彫刻價二十五圓ヨリ三十七圓マデ
●二十二金目方三匁五分付平象嵌入價三十一圓ヨリ四十七圓マデ

指輪は其人の正札なりとは千載不勉の名言男女に限らず其指にはめたる指環を見れば、其人の性質品格おのづから現はるゝ事、諸君御承知の通なり、なまじひ其品位を劣す様なる指輪は、寧ろ指さゞるが愈ぞかし、强に金の量が重くて、寶石が輝きて、彫刻が奇麗なる計で、品格を上るものに非ず、品格は金にて買ると思ふは誤なり、假令その價は高からずとも、其意匠や彫刻が優美なれば、何と無く氣高く見ゐて、其人までが奥ゆかしく成ること、是ぞ即ち美術の德なる本堂深く此に意を注ぎ、金製指輪の製作に意匠を凝し彫刻に精妙を竭し、内外の時好に魁して、殊に高尚を旨と致すなれば、其品格優美なるは勿論、瀟洒風流の意氣自然に溢れて、是を指せば其品格を進め、其人の性情さこそと見ゆるきつと保證いたすなり、願くは一覽して、本堂が諸君を欺かざる事を知し召せ、謹で白す

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地
天賞堂

時計及寶玉類
貴金屬美術品　商（電話番號本局三百三十三）

妙技一等賞牌



東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）
天賞堂小川町出張所

大坂市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七百三十三）
天賞堂大坂出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番地
天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町上通鍛冶屋町十番地
天賞堂熊本出張所

長崎市萬歳町上野屋方
天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色内町越中屋方
天賞堂小樽臨時出張所

（明治二十四年八月四日内務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷所）